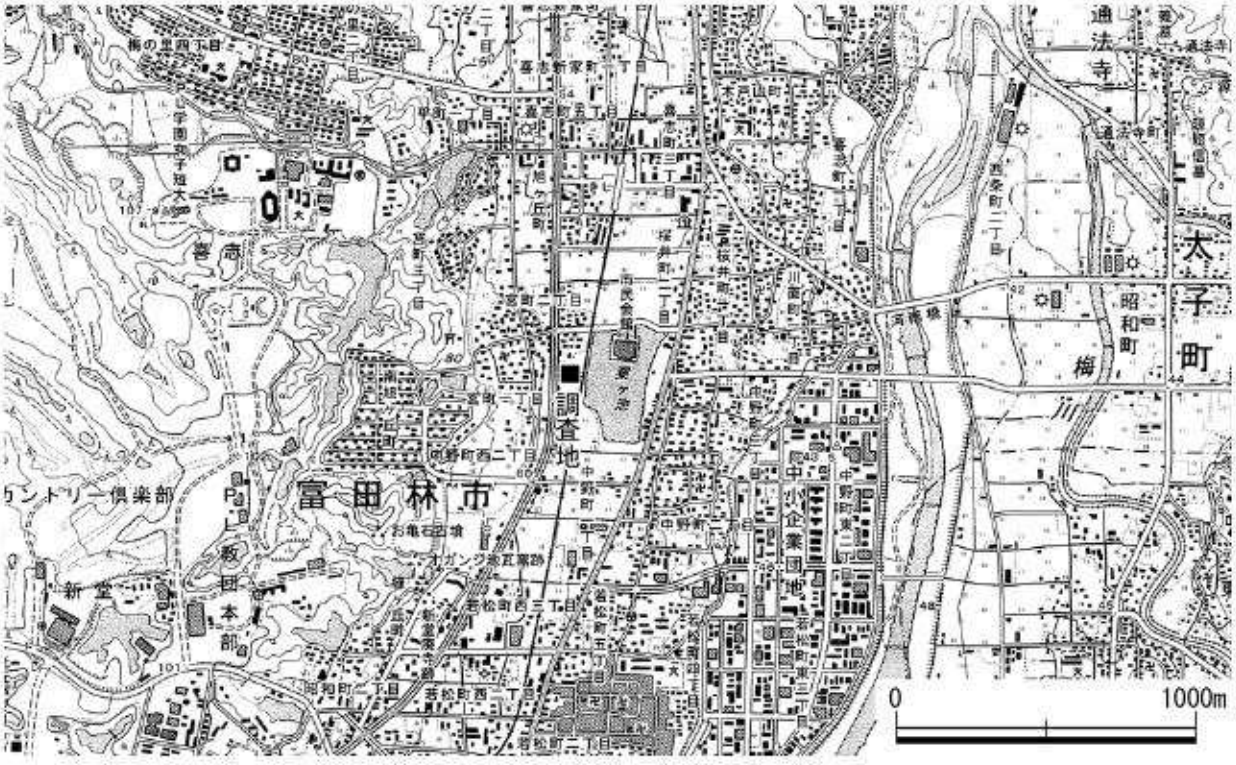
第１章　調査にいたる経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

宮町遺跡は、富田林市宮町一丁目に所在する古墳時代から中世に存続する複合遺跡である。平成15年度に実施した試掘調査で発見された。発掘調査は、主要地方道美原太子線（粟ヶ池工区）道路改良事業に伴うものである。美原太子線については、一般国道166号（竹内街道）から一般国道（旧）170号の区間はバイパス整備が完了しており、今回の粟ヶ池工区はこれを西に延伸するものである。一般国道（旧）170号から粟ヶ池を橋りょうで通過するとともに、近鉄長野線を高架化し、一般国道170号（大阪外環状線）に至る区間について道路整備を行うものである。一般国道166号から一般国道170号までを結ぶことにより、交通渋滞の緩和と利便性の向上をはかることが目的である。粟ヶ池工区の延長は約400ｍであり、今回の調査はその西端の延長73ｍを対象とするものである。なお粟ヶ池工区の内、粟ヶ池より東の約60ｍについては、平成16年度と同22年度に中野北遺跡として発掘調査を実施した。また平成18年度には、粟ヶ池内の橋りょう桁受け部18箇所の確認調査を実施している。

今回の事業箇所は、当初は遺跡範囲外ではあるものの中野北遺跡に接することから関連遺構の存在が予想された。そこで、大阪府都市整備部富田林土木事務所建設課と大阪府教育庁文化財保護課は、その取り扱いについて協議を行い、平成15年度に試掘調査を実施したものである。その結果、弥生時代～鎌倉時代の遺構・遺物が確認されたことに伴い新規遺跡「宮町遺跡」とし、大阪府教育庁が大阪府都市整備部から依頼を受けて、発掘調査を実施することになったものである。

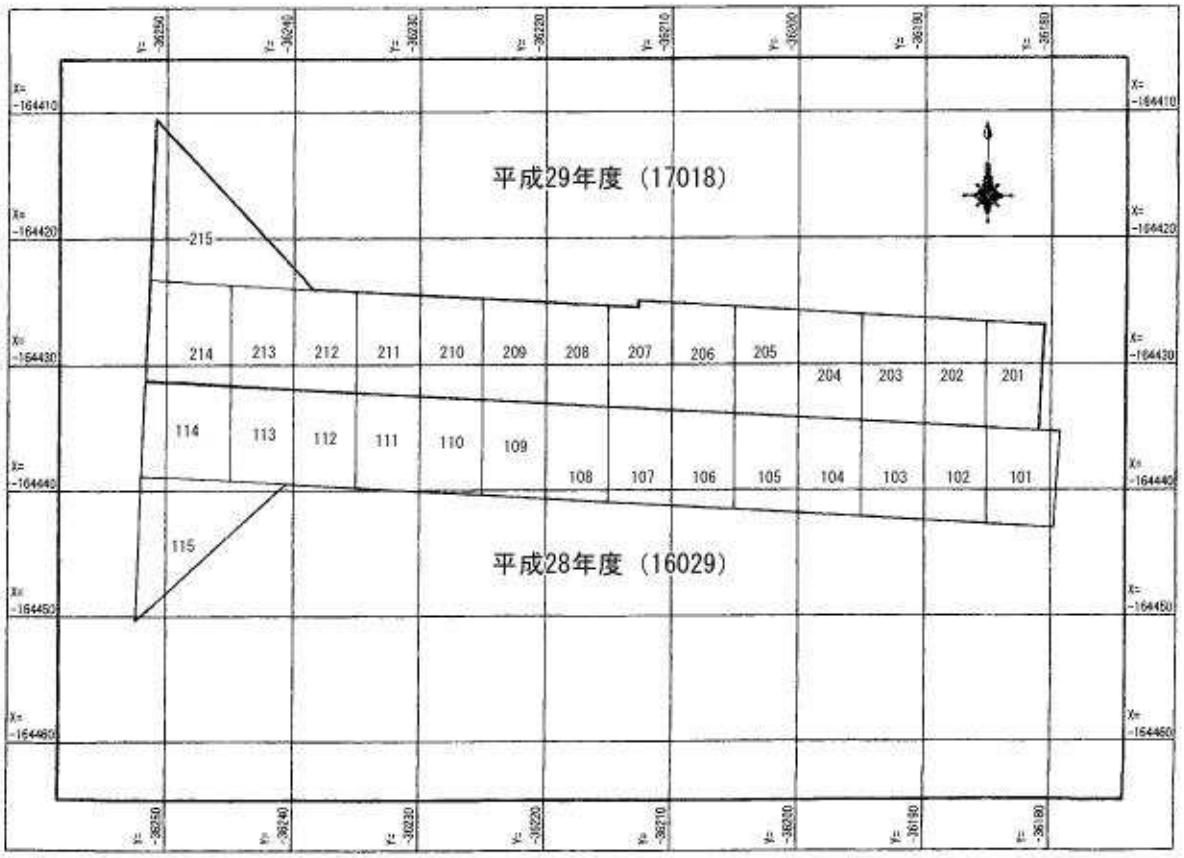


第１図　調査地位置図

第２節　調査の経過と方法

発掘調査の対象地は、美原太子線が一般国道170号に取付く部分で、東は近鉄長野線に挟まれた箇所である。調査地は長さ約73ｍ、幅約16ｍであり、一般国道170号に取付く部分は幅約43ｍのラッパ口状になる。現地は水田であり、発掘調査の計画段階では用地買収が未了の部分もあったことから、平成28年度（調査番号16029）と平成29年度（調査番号17018）に分割して調査を行った。それぞれの調査面積は605㎡、687㎡である。

調査は、ほぼ東西方向の道路用地のセンターライン付近で南北に分割して行った。遺構番号は平成28年度が001～139、平成29年度が201～374を付したが、煩雑を避けるために28年度検出の遺構が平成29年度調査地におよぶ場合は、28年度の番号を踏襲した。また遺物の取り上げは、調査地に打設した世界測地系による東西５ｍピッチの調査杭を基準に行った。具体的には、第２図のように調査地がほぼ東西方向であることから東から西に向かい、平成28年度は101区～115区、平成29年度は201区～215区とした。なお作業の効率化をはかるため、平成28年度にはヘリコプター、平成29年度にはトラッククレーンによる空中写真測量を実施している。



第２図　調査地区割図

第２章　位置と歴史的環境

宮町遺跡は富田林市宮町一丁目に所在する。平成15年度の試掘調査により新規発見された遺跡で、弥生時代から中世に存続する複合遺跡と認識されたが、遺跡の実態は不明であった。今回、上層で中世の耕作溝、地山面で古墳および古墳時代後期と奈良時代の柱穴・土坑・溝・落込み等が確認され、集落は墓域から居住域、そして生産域に変遷した事が明らかになった。なお遺物としては、若干の石器とサヌカイト剥片を含む。第３図の範囲の遺跡動向を紹介し、宮町遺跡の置かれた歴史的環境を示す。

宮町遺跡周辺の遺跡は、石川左岸に形成された中位段丘上に形成された遺跡群と言うことができる。地理的に概観すると、東部を石川が北流しており、その西岸沿いに沖積地が形成される。さらにその西側は10ｍ程度の比高差のある段丘崖が南北方向に見られ、幅１km前後の中位段丘を形成する。この中位段丘の東側を東高野街道が南北に走り、その街道沿いに遺跡が集中的に形成されている。なお中位段丘面の中央には、埋積谷が南北方向に存在する。

１）弥生時代　弥生時代中期の集落遺跡として有名な喜志遺跡と中野遺跡があり、さらに南には甲田南遺跡がある。前二遺跡はサヌカイト製石器の未成品やサヌカイト剥片を大量に出土することから石器製作の専業集落と考えられている。甲田南遺跡では多くの竪穴住居が確認される通常の拠点集落であり石器製作は行っていない。なお喜志遺跡では第Ⅲ様式古段階の方形周溝墓、喜志西遺跡では第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式が見つかるので、喜志西遺跡は喜志遺跡の墓域が拡張したものと考えられる。弥生時代後期には、石川西岸の弥生遺跡はいっせいに姿を消し、石川東岸に移動して高地性集落を形成する。

２）古墳時代　前期古墳の集中する地域である。前期古墳は、羽曳野丘陵東縁辺に立地しており、すでに消滅したが鍋塚古墳と真名井古墳が有名である。他に宮神社裏山１号墳がある。美具久留御魂神社境内の最高点に立地する古墳群（宮神社裏山古墳群）であり、古墳時代前期の築造とされる前方後円墳（１号墳）と古墳時代後期とされる３基の円墳（２～４号墳）がある。土師器、埴輪が採取されているが時期の詳細は不明である。古墳時代前期の集落遺跡として喜志西遺跡がある。遺跡範囲西側の羽曳野丘陵の東側で、土坑・溝・ピットや流路が確認され布留式土器が多数出土している。

中・後期古墳は、丘陵東縁辺上の他に段丘上で埋没古墳として確認できるようになる。５世紀後半から６世紀後半にかけての埴輪が、喜志遺跡の周囲で９地点、粟ヶ池遺跡で１地点、中野遺跡で３地点、甲田南遺跡で５地点が確認されており、付近に古墳が存在したと考えられている。古墳自体が確認された事例として、中野遺跡で見つかった新堂古墳がある。墳形は不明であるが、古墳状の高まりと周溝の一部が見つかり、６世紀前半の埴輪が出土している。また中野北遺跡では小型方墳が確認されている。主体部は川原石積みの小型石室、墳丘規模は３～3.5ｍ、周溝を含めても５ｍ四方である。また近年、喜志南遺跡の低位段丘上でも詳細は不明ながら、川原石積みの小型石室が発見された。床面に５世紀前半の円筒埴輪片を敷く。時期は石室の形態から６世紀以降と推定されている。

古墳時代中・後期の集落が、宮町遺跡の他にも粟ヶ池遺跡、中野遺跡で確認されている。粟ヶ池遺跡は、遺跡範囲の中央が南北に延びる微高地、その西辺と東辺は南北方向の浅い谷地形である。微高地上の数カ所で発掘調査が行われピットや落込みが確認されている。古墳時代後期と奈良時代の二時期であ

るが、遺跡の性格は不明である。なお前者には同時期の円筒埴輪を含む。中野遺跡では、遺跡中央部で幅５ｍの人工の南北溝（溝８）と隣接して掘立柱建物８棟が確認されている。時期は６世紀中頃～後半である。なお溝８などから５世紀後半の円筒埴輪が出土している。

３）古代　中野遺跡の北東部にある谷から、飛鳥～室町の大量の瓦が出土し、他にも塔の心礎や仏像の光背らしき木製品も含まれる。また周辺で７世紀後半の統一新羅の土器も出土している。かつて寺院があったと考えられ、「中野廃寺」と命名されている。同じく遺跡範囲の北部、外環状線の歩道設置に伴う調査で柱穴の集中箇所が確認された。時期は飛鳥・奈良時代で、建物の軸は正方位をとり、柱掘方は約１ｍ四方である。調査区は幅１～２ｍであるため遺構の性格は不明であるものの、調査者は官衛的建物の可能性を示唆している。

中野北遺跡では、段丘崖に面した東北部域で、道路建設や宅地造成に伴う発掘調査が行われている。古代から中世の濃密な遺構が確認され、報告書の刊行が待たれる。一部の遺構が報告されており、８世紀末～９世紀の土坑、11世紀の土坑、12世紀の溝などが検出されている。７・８世紀の遺物も混在しており、古代の長期間におよぶ遺構群と考えられる。

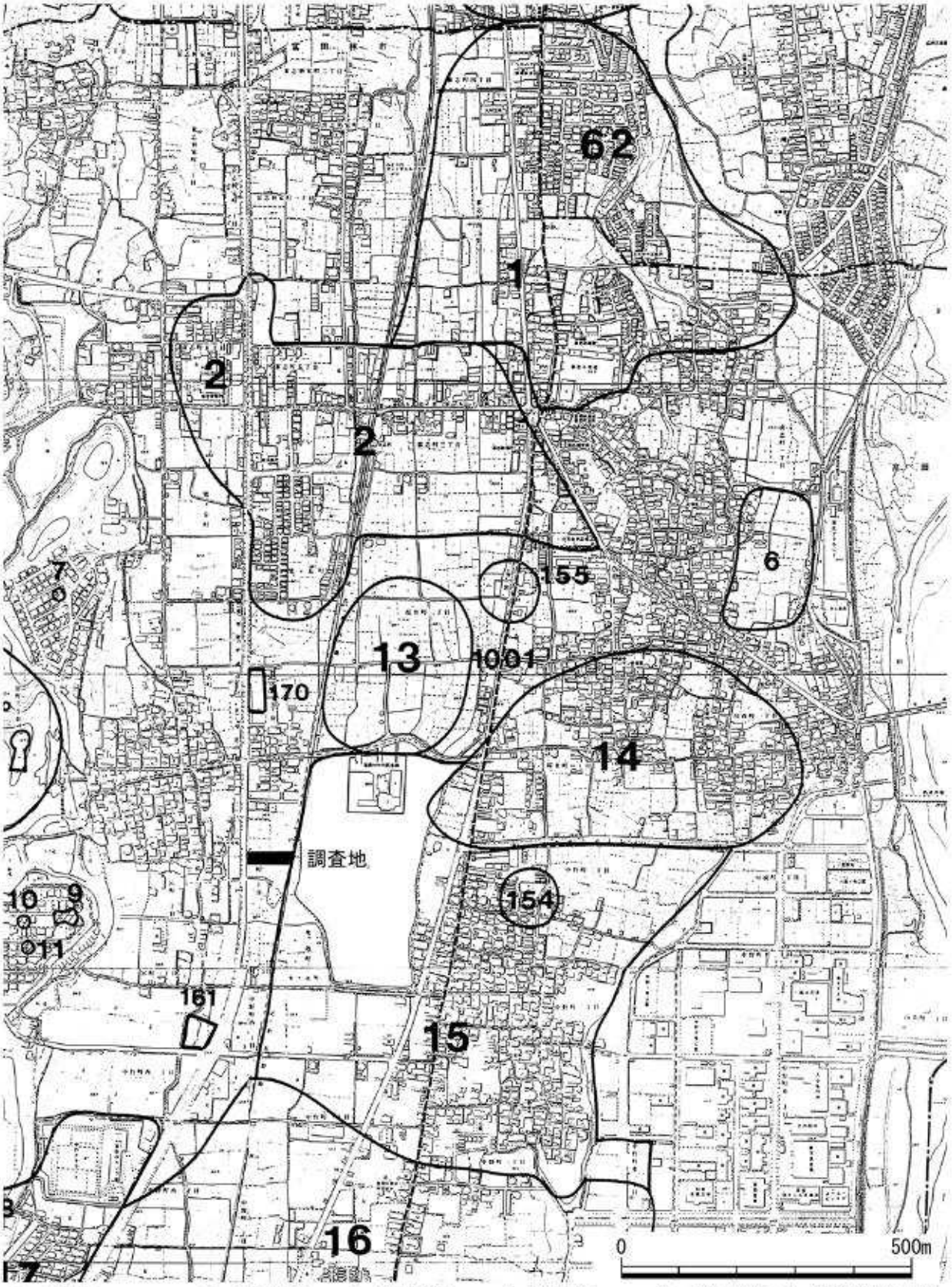
桜井遺跡では、遺跡の性格は不明ながら７世紀前半～８世紀中葉以降の溝・土坑・ピットなどの遺構が多数確認された。新堂廃寺の創建に関わる桜井屯倉もしくは桜井臣の本貫地とする説がある。

喜志南遺跡では、段丘崖の近くから９～10世紀の掘立柱建物２棟が確認された。柱掘方１～1.5ｍの立派な建物が同じ主軸で並ぶ。周囲にも整然と並ぶ建物群が存在する可能性が高いと考えられている。

粟ヶ池は、中位段丘面の中央に存在する南北方向の埋積谷をせき止めて築造された池で、北に広がる耕地を灌漑する。築造時期は明確でないが、以下の根拠で奈良時代築造の可能性が示されている。粟ヶ池東岸で行った中野北遺跡の調査で東側堤と同じ方向の奈良時代南北溝が見つかったこと、南方２km の谷川遺跡で粟ヶ池に水を入れる「深溝水路」と考えられる奈良時代の溝が見つかったことである。

４）中世　中野遺跡では昭和58年度、市教委が遺跡中央部で行った調査で鎌倉時代～室町時代の土坑、井戸、溝、ピットなどが確認された。ピットから正方位の掘立柱建物７棟が重複して復元されており集落域と考えられる。喜志南遺跡では、中世初期である12世紀後半の遺物が多数出土した。まとまってピットが確認されており集落域と考えられる。喜志西遺跡は現在も条里地割が明瞭に残る地域にあり、中世遺物包含層の上面で正方位の耕作溝跡が確認されている。中世包含層は数面があり多くの中世遺物が出土している。宮町遺跡と同様の状況と考えられる。その他の遺跡でも、中世の遺構・遺物の検出は多いが、性格の明確でない場合がほとんどである。

中野北遺跡には、喜志城、中野古城など楠氏にかかわると考えられる中世後期の城館跡がある。喜志城は、中位段丘面上にあり、周囲よりやや小高い地形に立地する。現在の字名は「北條」であるが、「城の淵」「馬場」「大手」が残る。市教委による平成28年度調査で、15・16世紀には埋まる南北方向の巨大な溝が確認された。規模は幅６ｍ、深さ1.5ｍで中世城館跡の堀と考えられる。平成19年度調査でこの溝の北端（L字状に屈曲する）が確認されており一辺100ｍ以上の城館が復元できる。またこの溝の東側では、14・15世紀の遺構が多数確認されている。中野古城は、低位段丘に向かって突出する中位段丘崖先端に立地する。周囲に「城ヶ跡」「城ヶ西」の字名が残る。



1．喜志遺跡　2．喜志西遺跡　6．喜志南遺跡　7．鍋塚古墳　9．真名井古墳　10．宮前山古墳１号墳
11．宮前山古墳２号墳　13．栗ヶ池遺跡　14．桜井遺跡　15．中野北遺跡　16．中野遺跡　17．新堂廃寺
154．喜志城跡　155．桜井北遺跡　161．中野西遺跡　170．栗ヶ池西遺跡　1001．東高野街道

第３図　周辺の遺跡分布図

第３章　調査結果

第１章第２節に記載したように、調査地は東西方向に長さ約73ｍ、南北方向に幅約16ｍであり、一般国道170号に取付く部分は最大幅約43ｍのラッパ口状になる。調査は調査地を長軸方向に分割し、平成28年度に南側、平成29年度に北側を実施したが、同一遺構を分割して調査したものも多い。遺構番号は平成28年度が001～139、平成29年度が201～374を付したが、28年度検出の遺構が平成29年度調査地におよぶ場合は、28年度の番号を踏襲した。

調査箇所は水田であり、現代の耕作土、床土までを機械で掘削した後、それ以下を人力で掘削した。その結果、下記のⅢ層上面で正方位の耕作溝跡、地山面で中世以前の多数の遺構が確認された。

第１節　層序

調査箇所の層序は比較的単純である。平成28年度に調査区南壁の土層断面図、平成28・29年度に調査区西壁の土層断面図を作成した。層序は、ローマ数字で大別し、アラビア数字で細別して報告する。

Ⅰ層；現代耕作土（Ⅰ－１～２層）　耕作土は黒褐色土（Ⅰ－１層）、褐灰色土（Ⅰ－２層）である。層厚はⅠ－１層が15～20cm、Ⅰ－２層が３～８cmである。調査箇所は４枚の水田を横断するもので、水田面の高さは西端の水田面が高く、東方に向かって低くなる。すなわち西端水田面からT.P.＋57.12ｍ、57.04ｍ、56.95ｍ、56.78ｍである。

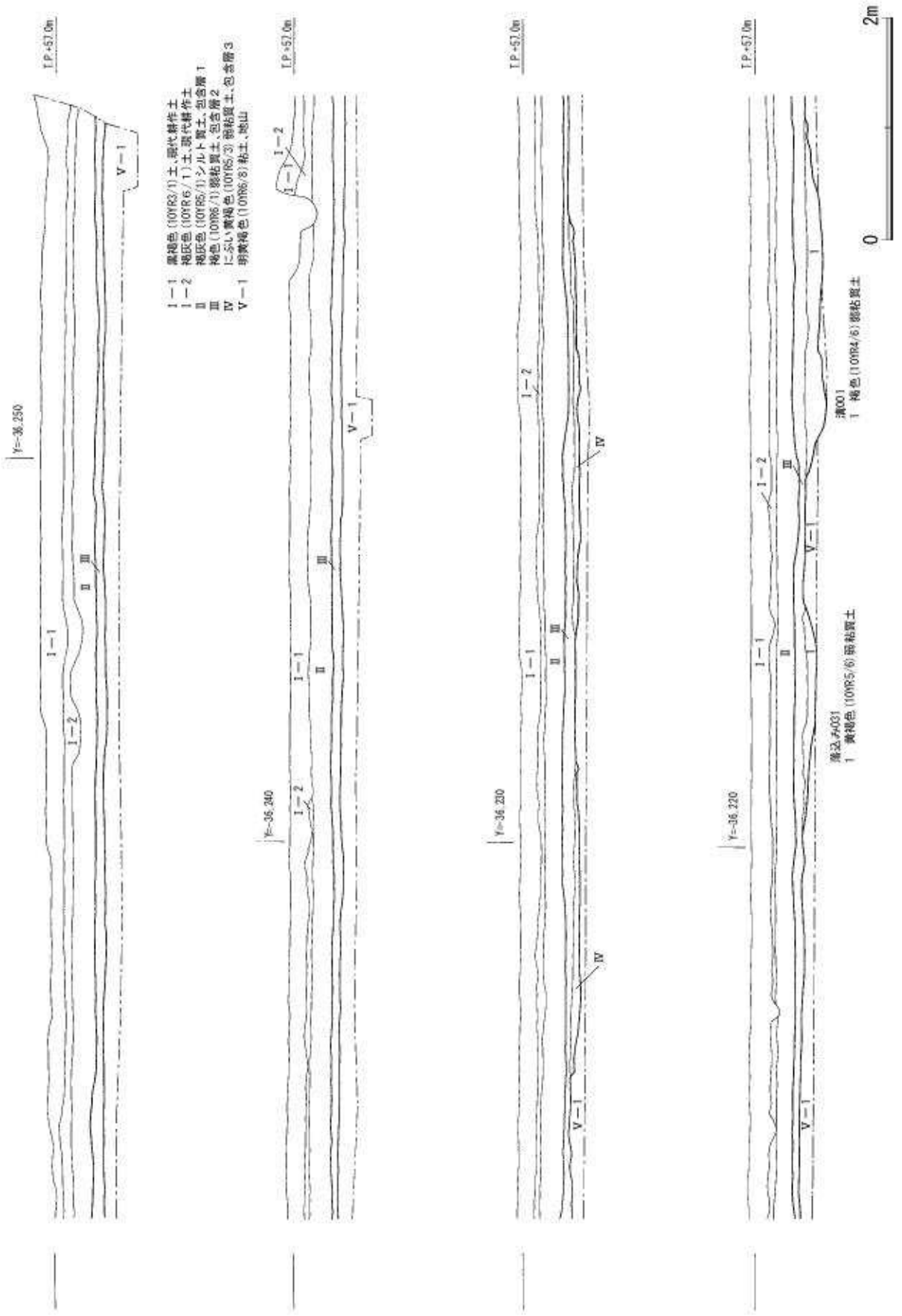
Ⅱ層；包含層１　褐灰色シルト質土。調査区の全域で確認できる。地形の低いＹ＝－36,213程度より西側では層厚15～20cmで西方ほどに厚い。また東側では層厚５～10cmと薄く、Ｙ＝－36,190より東方では旧耕土からの撹拌が著しい。

Ⅲ層；包含層２　褐灰色弱粘質土。地形の低いＹ＝－36,210程度より西側で確認できる層序で、東側には見られない。層厚５～10cmで東方ほどに薄くなる。本層上面は第１遺構面であり、条里型地割による正方位のいわゆる鋤溝群が確認できる。

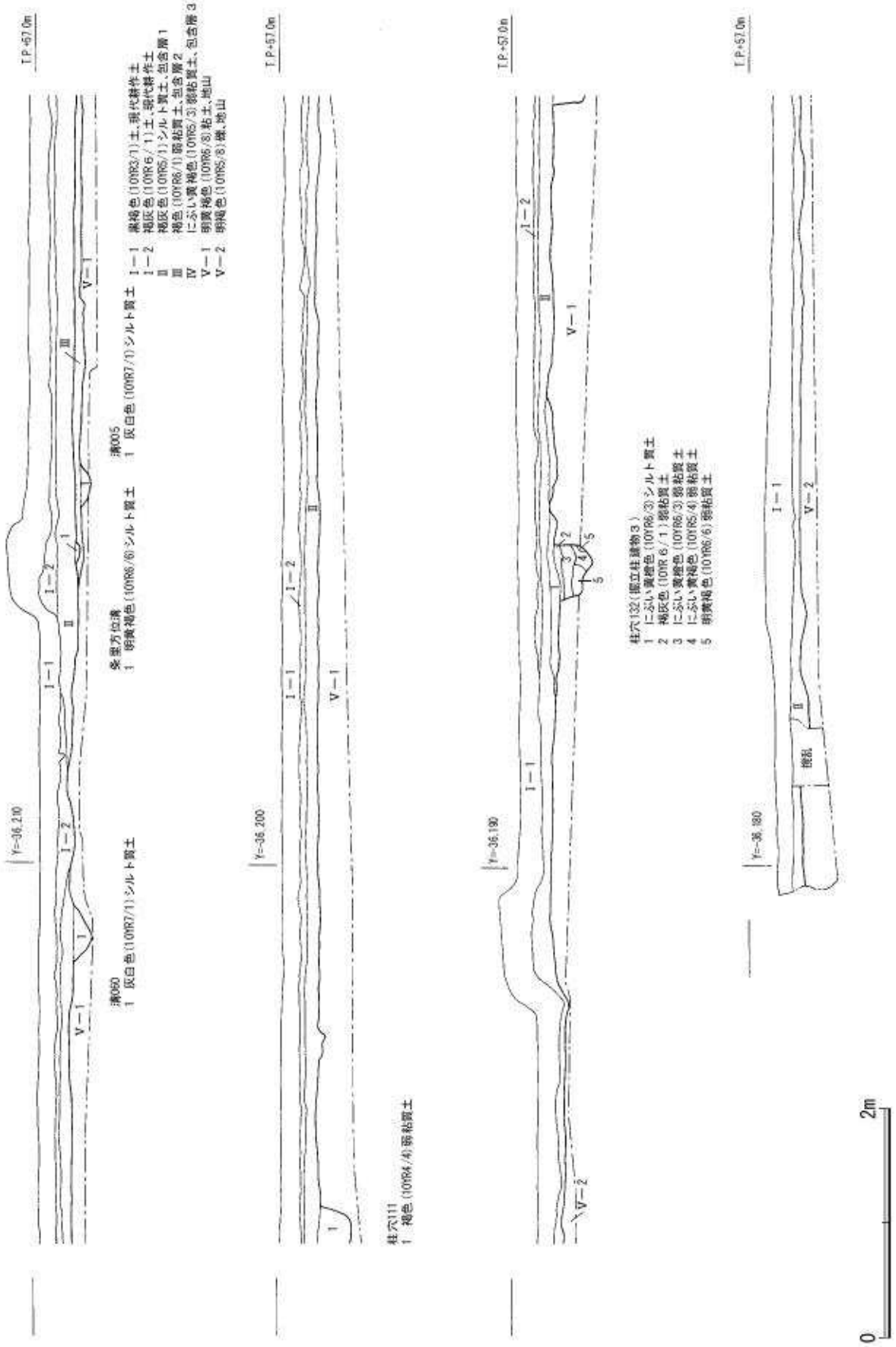
Ⅳ層；包含層３　黄灰色粘質土であり、褐色斑を含む。Ⅴ層の低くなる調査区の北西部のみで確認できる層序で、土層図では西壁北半に見られる。層厚４～８cm程度である。

Ⅴ層；基盤層（Ⅴ－１～２層）　いわゆる地山であり、明黄褐色粘土（Ⅴ－１層）と、その下部の明褐灰色礫層（Ⅴ－２層）からなる。Ⅴ－２層の表面は凹凸があり、Ｙ＝－36,191程度より東ではⅤ－１層は確認できず、Ⅴ－２層のみとなる。本層上面は遺構面であり、中世の耕作痕、古墳時代から平安時代初頭の遺構が確認できる。

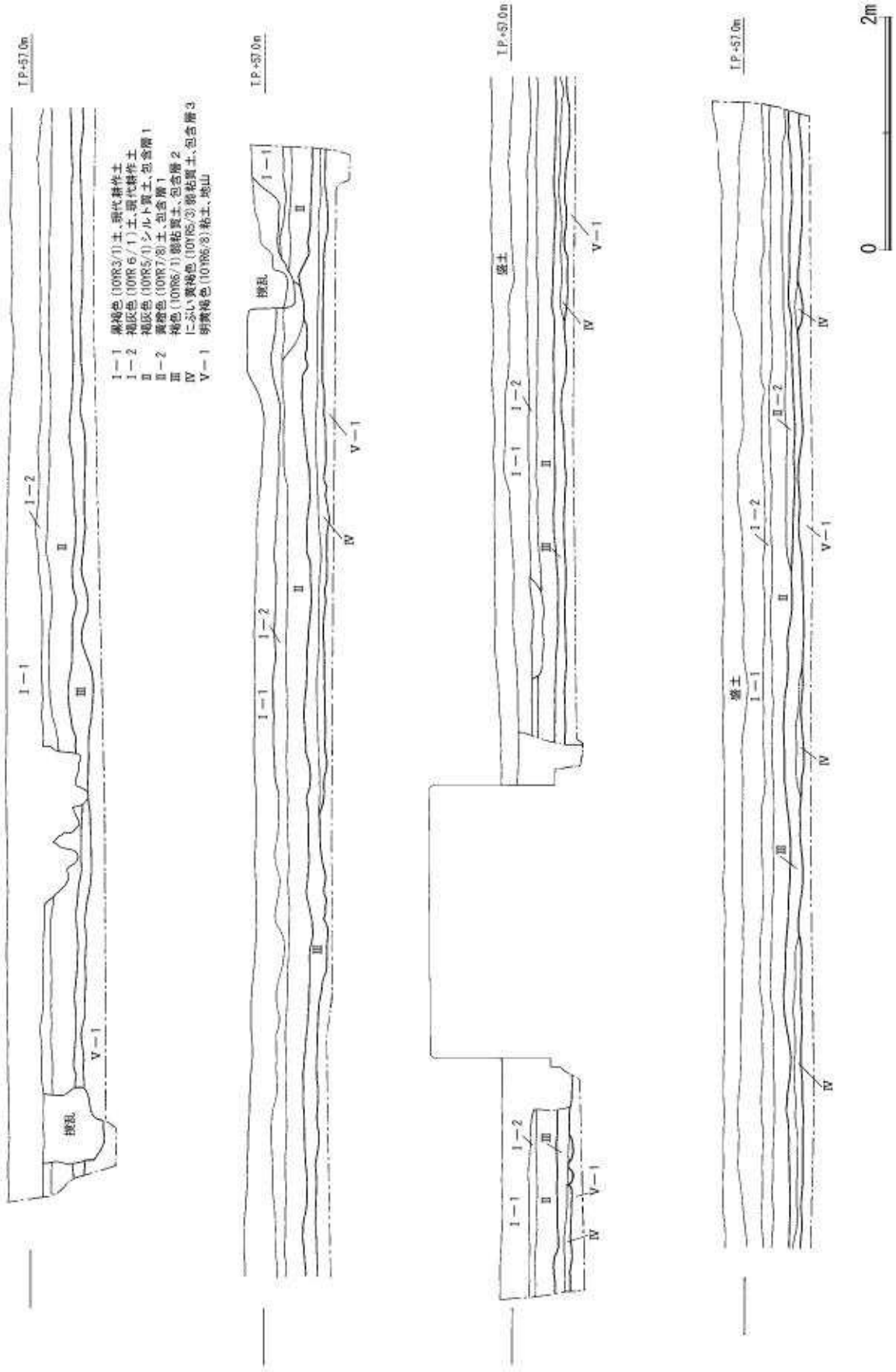
現地の地形は中位段丘であるが、地山面は凹凸が激しい。調査を行った東西73ｍの範囲ですら一様ではない。周囲の地形と総合すると、以下のように、南北方向の低地と微高地が埋没していることがわかる。西から概観する。①宮町集落の立地する扇状地。②国道170号部分を最深にする微低地。③宮町遺跡ののる微高地。④粟ヶ池の西岸（活断層と推定）に沿う谷で、堤防より北で近鉄線部分を最深にして北にのびる。⑤粟ヶ池中央を北にのびる微高地で、堤防より北で粟ヶ池遺跡がのる。⑥粟ヶ池の東岸（活断層と推定）に沿う谷。⑦中野集落の立地する微高地で、中央部を東高野街道がはしる。この微高地は東に向かって急激に低くなり段丘崖を形成する。⑧石川の氾濫原。



第４図　南壁土層断面図１



第５図　南壁土層断面図２


T.P.+57.0m
I－1　黒褐色（10YR3/1）土、現代耕作土
I－2　褐灰色（10YR 6／1）土、現代耕作土
II　褐灰色（10YR5/1）シルト質土、包含層1
II－2　黄褐色（10YR7/8）土、包含層1
III　褐色（10YR6/1）粘質土、包含層2
IV　にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土、包含層3
V－1　明黄褐色（10YR6/8）粘土、地山
撹乱
盛土
2m
0

第6図　西壁土層断面図

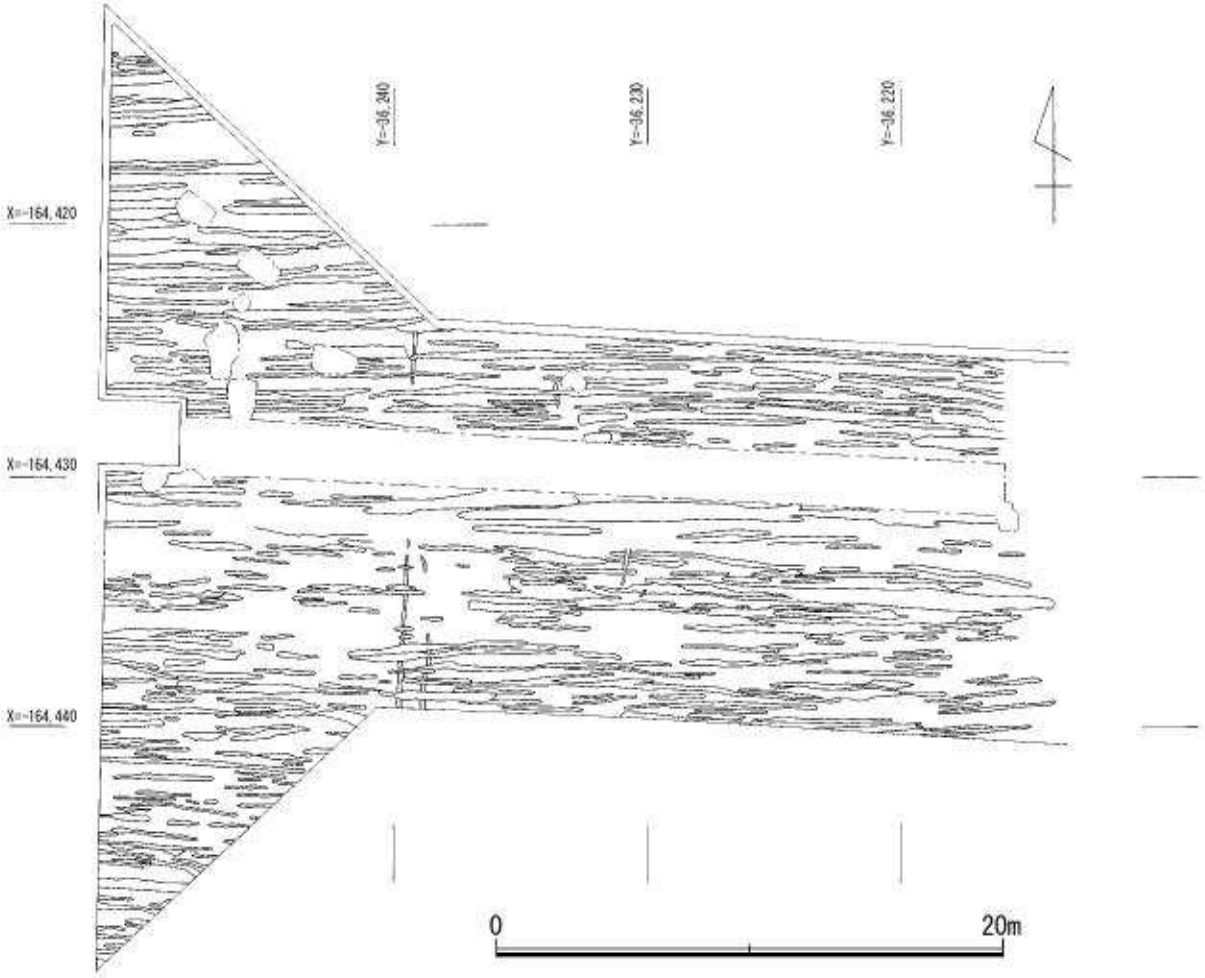
第２節　遺構と遺物

調査区の規模は、Ｙ＝－36,180～Ｙ＝－36,253の間の長さ約73ｍ、幅約16ｍである。以下の報告では、世界測地系による座標、および調査地に打設した世界測地系による東西５ｍピッチの調査杭を基準に設定した小区画（１～15区）で適宜に記載する。平成28年度は101区～115区、平成29年度は201区～215区である。

層序は単純で、現代耕作土を除去すると、遺物包含層３層（上から包含層１、同２、同３）、地山と続く。第１節で報告したように、地山は遺構が集中する東半部が高く、西方に向かって徐々に低くなる。包含層１は全面で認められ、包含層２は地山の低くなるＹ＝－36,215より西部に認められる。包含層３は地山の最も低くなる北西端部にのみ認められる。遺構は包含層２上面と地山面で確認できた。

（１）中世以降と包含層の遺物

鋤溝群（第７図）　Ｙ＝－36,215より西の包含層２上面で、条里型地割に沿う鋤溝群を検出した。東西方向の鋤溝が主体で、角度は正方位～３度程度南にふる。またＹ＝－36,238で南北方向の鋤溝が確認で



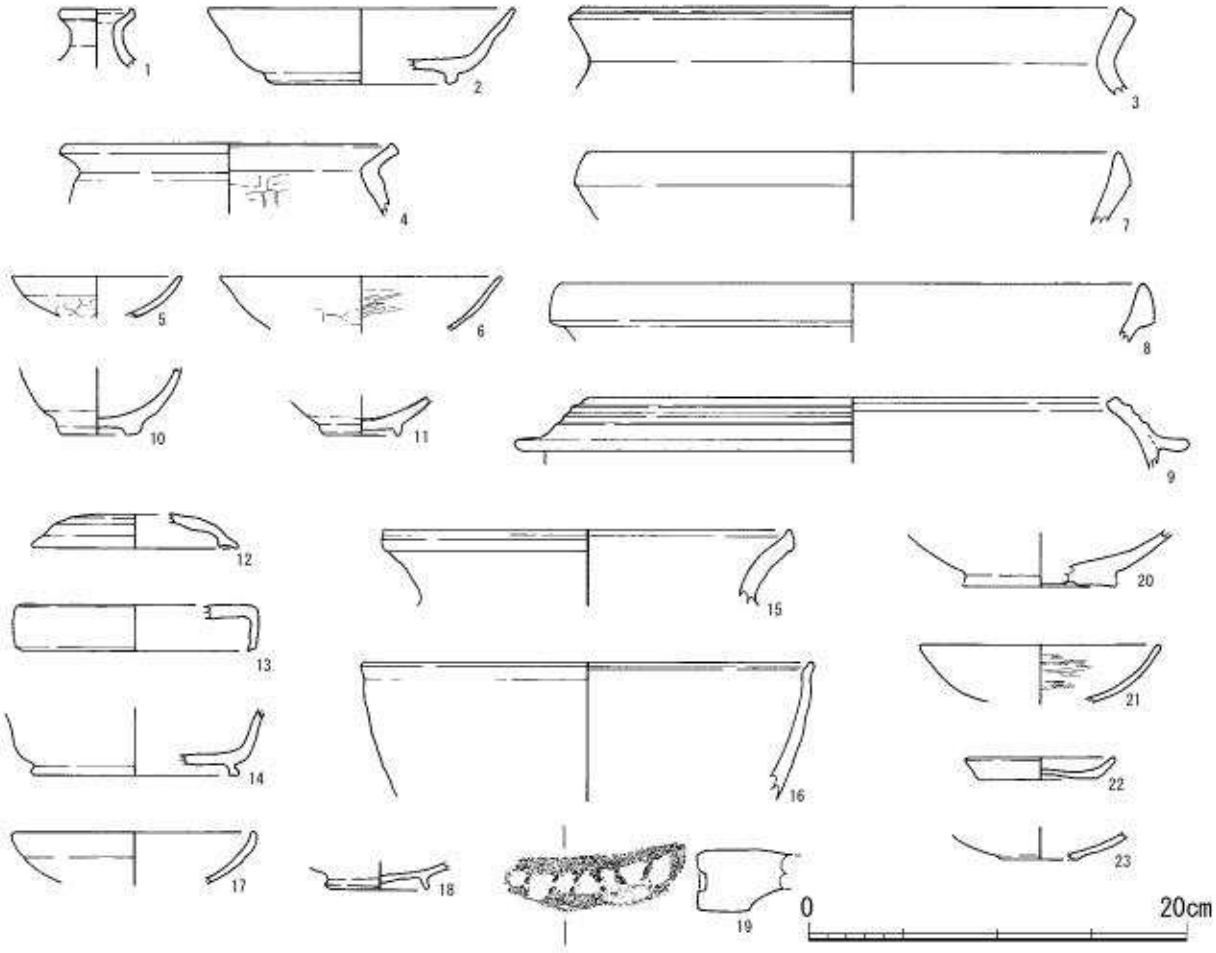
第７図　包含層２上面の遺構

き、方位は３度程度東にふる。鋤溝の埋土に瓦器片などの中世遺物が含まれるが、包含層２にも含まれており形成時期は不明である。

包含層・鋤溝群他出土遺物（第８図）　包含層遺物は、耕作によりほとんどが細片で摩滅が著しい。

１～11は包含層１出土遺物である。１・２は須恵器の瓶子と杯。８世紀中頃～後半に位置付けられる。３・４は土師器の甕。３は大型品だが小破片であり直径は不正確である。口縁端部はヨコナデによりくぼむ。４は羽釜とも考えられ体部外面ナデ、内面板ナデである。５は土師器の杯。摩滅が著しいが、胎土は精良で、明るい明赤褐色を呈する。６は瓦器椀。器壁は薄く、浅い形態から13世紀に位置付けられる。７は土師器の鉢。小破片であり直径は不正確。８は東播系須恵器の鉢。破片のため直径は不確実である。14世紀に位置付けられる。９は瓦質の羽釜。小破片であり直径は不確実である。14世紀に位置付けられる。10は肥前陶器の椀。内面に目跡がなく17世紀に位置付けられる。

12～19は包含層２出土遺物である。12～15は須恵器。12は小型化したかえりを有する蓋で、ロクロ回転右方向。７世紀後半に位置付けられる。13は短頸壺の蓋で、８世紀に位置付けられる。14は杯、15は甕である。16・17は土師器。16は深鉢であり、口縁端部内面をくぼませる。内外面ナデ仕上げ、８世紀に位置付けられる。17は杯であり、口縁は内湾し端部は丸くおさめる。色調は明褐灰色を呈する。18は瓦器椀。摩滅により調整不明。高台径5.2cm程度、12世紀に位置付けられる。19は軒平瓦。顎は段顎であり、焼成はやや軟質、摩滅により調整は不明である。胎土には、角ばった粗い石英・長石を多量に含

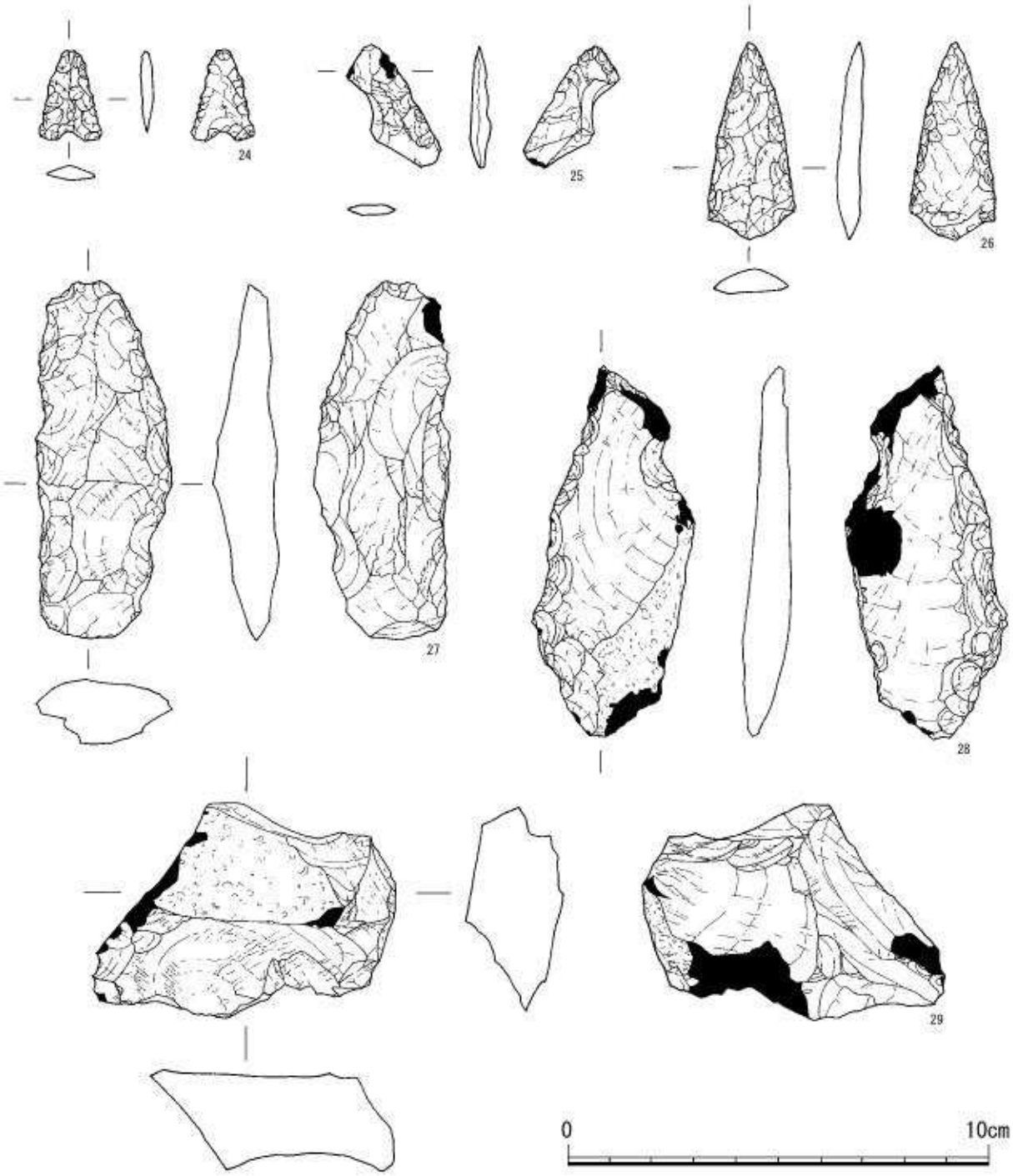


第８図　包含層他出土遺物実測図

む。

20～22は包含層２上面で検出した鋤溝出土遺物である。20は緑釉陶器の素地。内面に重ね焼きの痕跡がある。９世紀中頃に位置付けられる。21は瓦器椀。口径12.5cm程度で、浅い形態から13世紀に位置付けられる。22は土師器の小皿。摩滅により調整不明。

23は地山面検出の斜行溝096出土の瓦器椀である。摩滅により調整不明。高台は径４cm程度、低い断面三角形だが形骸化には至らず、13世紀に位置付けられる。



第９図　包含層出土遺物実測図

出土石器（第９図）　サヌカイト製の製品、剥片などが出土した。製品は石鏃・削器・石匙があり、他に石核と使用痕のある剥片がある。出土層位は24・26が215区の包含層３掘削において地山面にくい込む状況で出土したものである。他に25・28・29が包含層２、27が包含層１からの出土であり、本来は包含層３に帰属する遺物であろう。実測図の黒塗りは、新しい破損箇所を示す。

24～26は石鏃。24は凹基式であり、25は先端部の破片で型式は不明である。26は凸基式で、側面観はやや反っている。重量は、24は0.7ｇ、25は（1.6ｇ）、26は4.9ｇ。

27は縦長剥片を素材にする削器と考えられる。厚さ1.5cm程度の石材を素材としており、一短辺を残して、両面から刃部を形成する。28石匙と類似する機能を有するとも考えられる。重量は41.2ｇ。

28は縦長剥片を素材にする石匙。上端部片側に両面から粗い剥離を加えて抉りを入れ、つまみ部を形成する。一側縁に交互剥離によって刃部を形成する。背面側と上端面に自然面を残す。重量は38.7ｇ。

29は石核で、すべての剥離面がネガ面で構成される。厚さ３cm程度の板状石材の残核と考えられる。図左の上面と右側面に自然面を残す。重量は81.9ｇ。

中世斜行溝（第10図）　Ｙ＝－36,232～Ｙ＝－36,193の間の地山面で、いくぶん西方に斜行する数10条の細い溝状遺構が確認できた。断面図Ｙ＝－36,213地点で確認できるように、包含層２上面の鋤溝群より先行する。Ｙ＝－36,213前後に重複する数条の溝は田畑の区画や水路、その周囲に見られる幅５～20cm程度で浅い溝は耕作にともなう鋤溝と考えられる。遺物は少ないが、斜行溝096から23瓦器が出土しており、中世の耕作痕跡と考えておきたい。

（２）古代の遺構と遺物

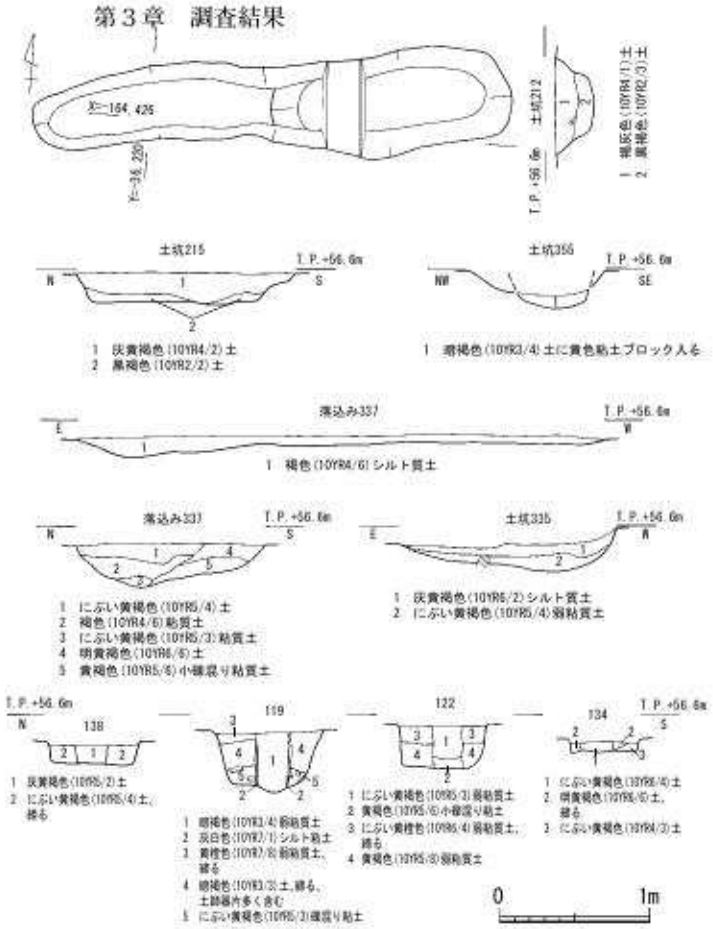
土坑212（第10・11図）　208区で検出した長楕円形の土坑である。規模は長さ3.2ｍ、幅0.5～0.6ｍ、深さは西半16cm、東半が二段掘りで深く25cm程度である。上段は褐灰色土。二段掘り部の埋土は黒褐色土であり、図示した土師器杯の他、時期不明の土師器片と須恵器片が10数点出土した。

出土遺物（第12図）　41は土師器杯。在地色の強い粗製品で、大きさは口径14.0cm、器高3.4cmである。口縁部端部を外方に引き出し丸くおさめる。口縁内外面ヨコナデ、体部内面ナデ、外面は雑なナデ仕上げである。見込み部分に非常に細い「＋」の線刻がある。８世紀後半に位置付けられる。

土坑215（第第10・11図）　209～207区で検出した不定形な土坑である。土坑212の南に隣接し、同じ方向性である。中央部は、平成15年度試掘のNo.１トレンチであり、南壁に沿う遺構残骸が本土坑なのかは不明。規模は東西の長さ約6.7ｍ。耕作溝群で破壊されるが、溝353が土坑の北東部にとり付く可能性が高い。底面は中央が高く、東部と西部が二段掘り状に深くなる。埋土の下部は黒褐色土である。

出土遺物（第12図）　30～34は須恵器。30は蓋であり焼け歪むが、径14cmに復元できる。つまみの痕跡があり基部径2.5cmである。ロクロ回転右方向。31は器高の高い平底の杯。外底部は回転ヘラケズリの後にナデで仕上げる。ロクロ回転右方向。32・33は杯。34は土坑215と一連の遺構と考えられる溝353出土の杯。35は土師器の鉢。胎土は精良で、明赤褐色を呈する。摩滅が著しいが内面にヘラミガキが残存する。以上は８世紀前半に位置付けられる。36は砂岩の円礫。楕円形の自然礫が持ち込まれたものであるが、明確な使用痕は確認できない。重量は335.8ｇ。

土坑355（第第10・11図）　205区で検出した楕円形土坑で、溝264より後出する。規模は長軸80 cm以上、



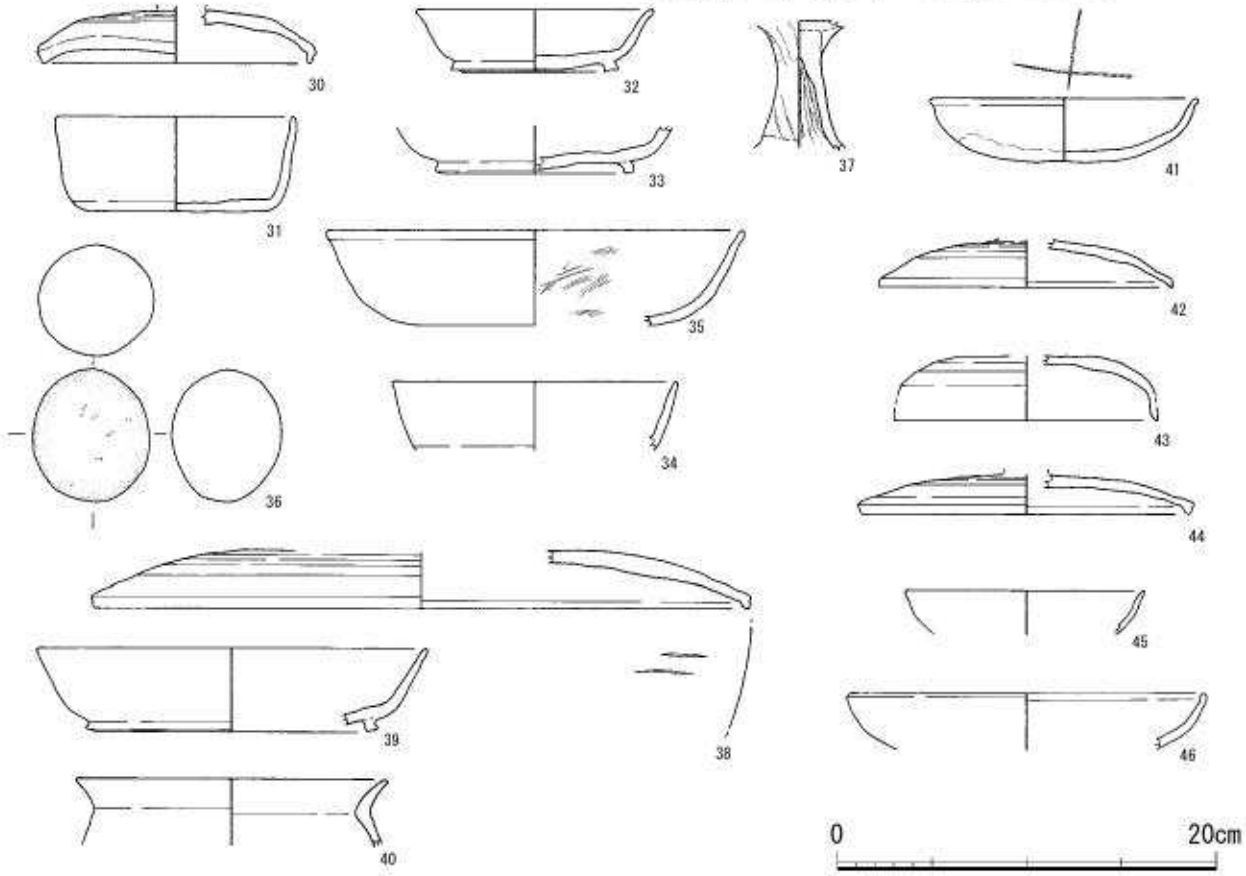
第11図　奈良・平安時代遺構の平面・断面図

短軸60cm以上、深さ25cm。埋土は、地山起源の黄色粘土ブロックを含む暗褐色土である。

出土遺物（第12図）　38・39は須恵器。38は大型の皿蓋であり、直径34.5cmである。内面に「＝」のヘラ記号がある。上面はヘラケズリで、ロクロ回転右方向。39は中型の杯であり、口径20.6cm、器高4.4cmに復元したが破片のためやや不正確である。40は土師器の甕。摩滅により調整不明である。以上の遺物は８世紀前半に位置付けられる。

土坑335（第第10・11図）　202区で検出したやや菱形を呈する土坑である。北部は撹乱により破損する。規模は約1.4ｍ四方、深さ20cm程度である。埋土は、灰黄褐色シルト質土とにぶい黄褐色弱粘質土である。落込み337と関連する可能性はあるが、明確ではない。

出土遺物（第12図）　42は須恵器蓋である。つまみは欠損する。上部はヘラケズリで、ロクロ回転右方向。８世紀前半に位置付けられる。



第12図　奈良・平安時代遺構の出土遺物実測図

落込み337（第第10・11図）　201・202区で検出した不定形で浅い落込みである。底面は凹凸があり、埋土は褐色シルト質土であるが、北側で溝・土坑状に深くなる。

出土遺物（第12図）　43・44は須恵器。43は杯蓋であり大きさは口径13.7cm、器高3.4cmである。ロクロ回転右方向。６世紀後半に位置付けられる混入品である。44は蓋であり、つまみは欠損する。ロクロ回転右方向。８世紀前半に位置付けられる。

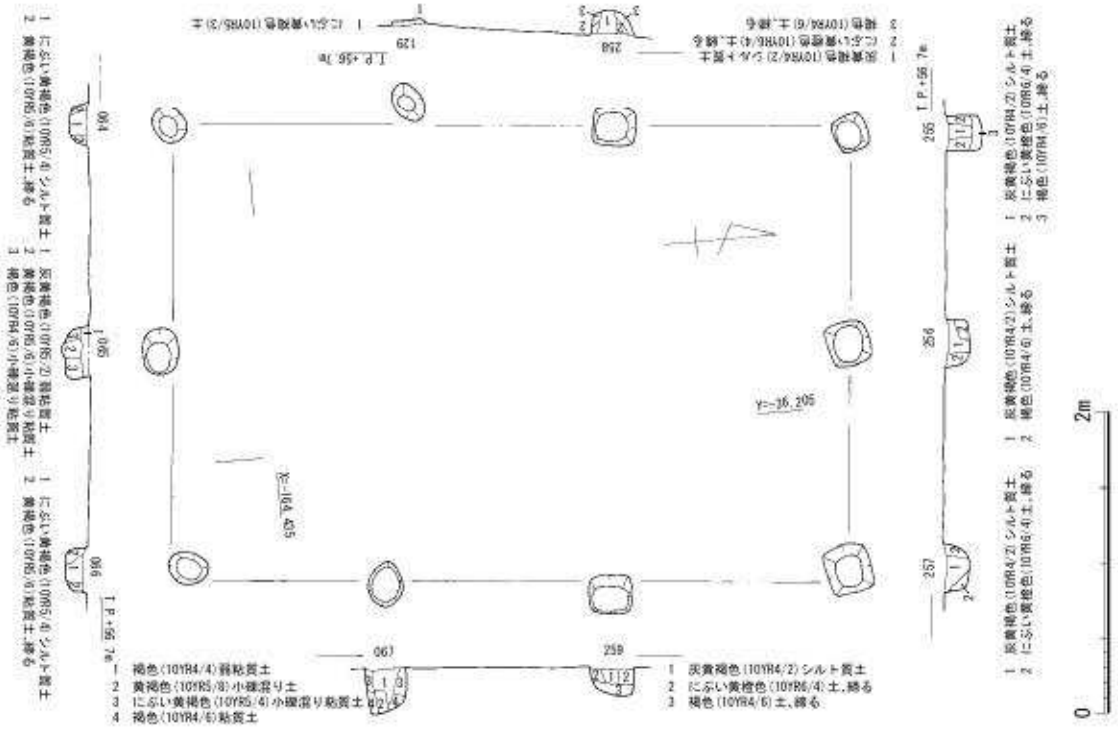
柵列（第第10・11図）　103区で検出した柱穴138・119・122・134から構成され、南は調査区外にのびると考えられ、北は柱穴の集中部分で確定できない。柱列の東西には、対応する柱穴が確認できず掘立柱建物ではなく柵列とした。柱掘方は一辺50～75cmの方形で、柱痕跡はすべて20cm程度。柱間隔は長さ1.8m、主軸方位はN－10°－Wである。

出土遺物（第12図）　45・46は柱穴119出土の土師器。45は杯であり、直径12.5cmに復元したが小破片のため不正確である。胎土は精良で、明赤褐色を呈する。内外面ヨコナデ仕上げ。46は皿であり、直径18.5cmに復元できる。胎土は精良で、明赤褐色を呈する。底面は摩滅で不明、その他はヨコナデ。口縁部端部は内側にやや丸くおさめる。８世紀後半～９世紀前半に位置付けられる。

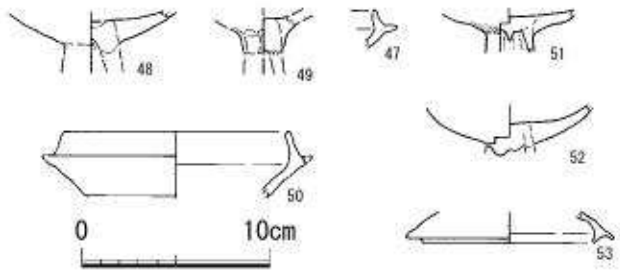
その他の遺構出土遺物（第12図）　37は溝248出土の土師器高杯の脚部。別作りの脚部を体部に強く押しつけて接合し、さらに接合部周囲に粘土を強くなでつけて補強する。内外面ともにナデ仕上げるが、成形時の強いシボリ痕が残る。７世紀初頭に位置付けられる。

（３）古墳時代の遺構と遺物

掘立柱建物１（第13図）　柱穴255・258・129・064（西側柱列）、柱穴257・259・067・066（東側柱列）、柱穴256・065（中間柱）からなる側柱建物である。側柱列の通りはやや悪い。なお建物周囲には他に柱



第13図　掘立柱建物１の平面・断面図



第14図　掘立柱建物１・２他の出土遺物実測図

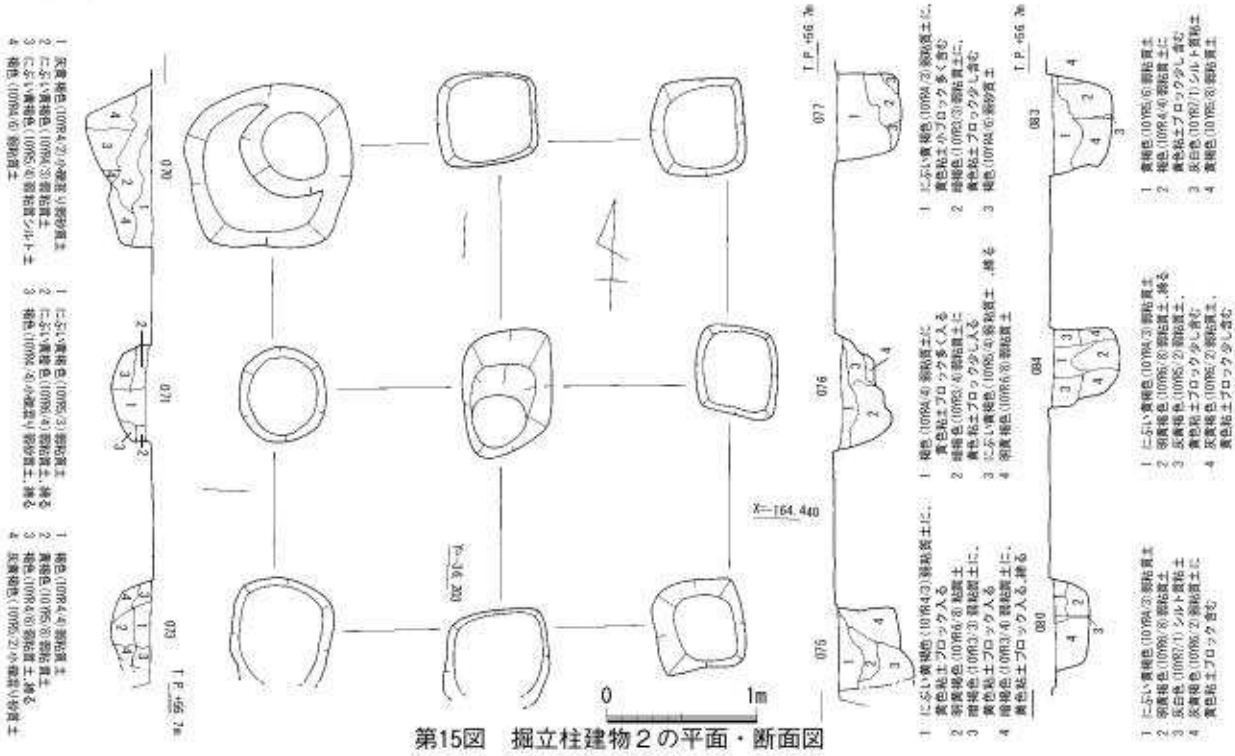
穴が見当たらないが、建物内側で柱列に乗らない柱穴260が確認できる。同様の形態・埋土の柱穴であり、建物を構成する柱穴の可能性もある。柱穴257・259は古墳周溝の埋土上面で検出できた。

建物は、南北に主軸をとるもので、梁行２間（3.0ｍ）、桁行３間（4.5ｍ）である。柱間寸法は、梁行・桁行共に1.5ｍ程度である。主軸方位はＮ－５°－Ｅ。柱掘方の規模は、残存状況の良好な北半では28～35cm四方の隅丸方形が主体であり、柱痕跡は10～14cm程度である。柱通りの悪さと小規模な柱穴からラフな造りの建物の印象を受ける。図示した遺物以外に、柱穴083からサヌカイト片、同084から須恵器・土師器、同076から土師器、同077から須恵器、同078から土師器が出土している。

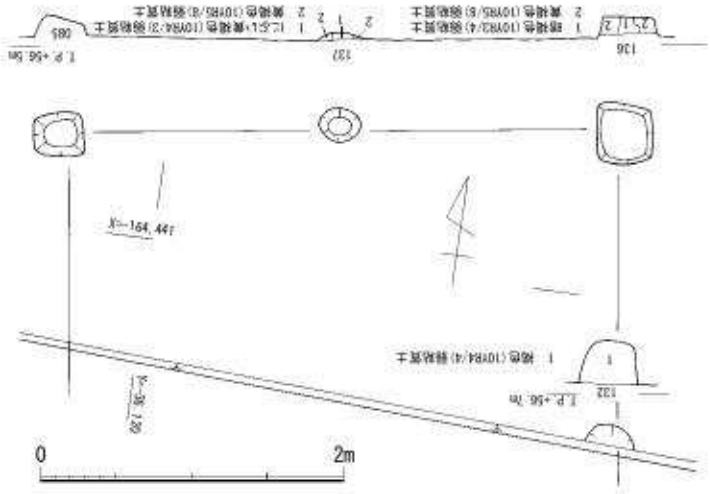
出土遺物（第14図）　47は柱穴256出土の須恵器杯身である。TK43程度に位置付けられる。

掘立柱建物２（第15図）　柱穴070・071・073（西側柱列）、柱穴077・076・075（中間柱列）、柱穴083・084・081（東側柱列）からなる総柱建物である。建替えがあると考えられるが、すべての柱穴で確認出来たわけではない。柱穴070・077・076・075・083は柱の抜き取りが確認できる。南方は、調査区外に延びる可能性もある。

建物は南北方向が長いので、南北に主軸をとると考えられ、梁行２間（3.0ｍ）、桁行２間（3.5ｍ）である。柱間寸法は、梁行側が1.5ｍ、桁行側が1.75ｍである。主軸方位はＮ－３°－Ｗ。柱掘方の規模は、70～60cm四方の隅丸方形が主体であり、柱痕跡は20～25cm程度である。図示した遺物以外に、柱穴083からサヌカイト片、同084から須恵器・土師器片、同076から土師器片、同077から須恵器片、同078から土師器片が出土している。



第15図　掘立柱建物２の平面・断面図



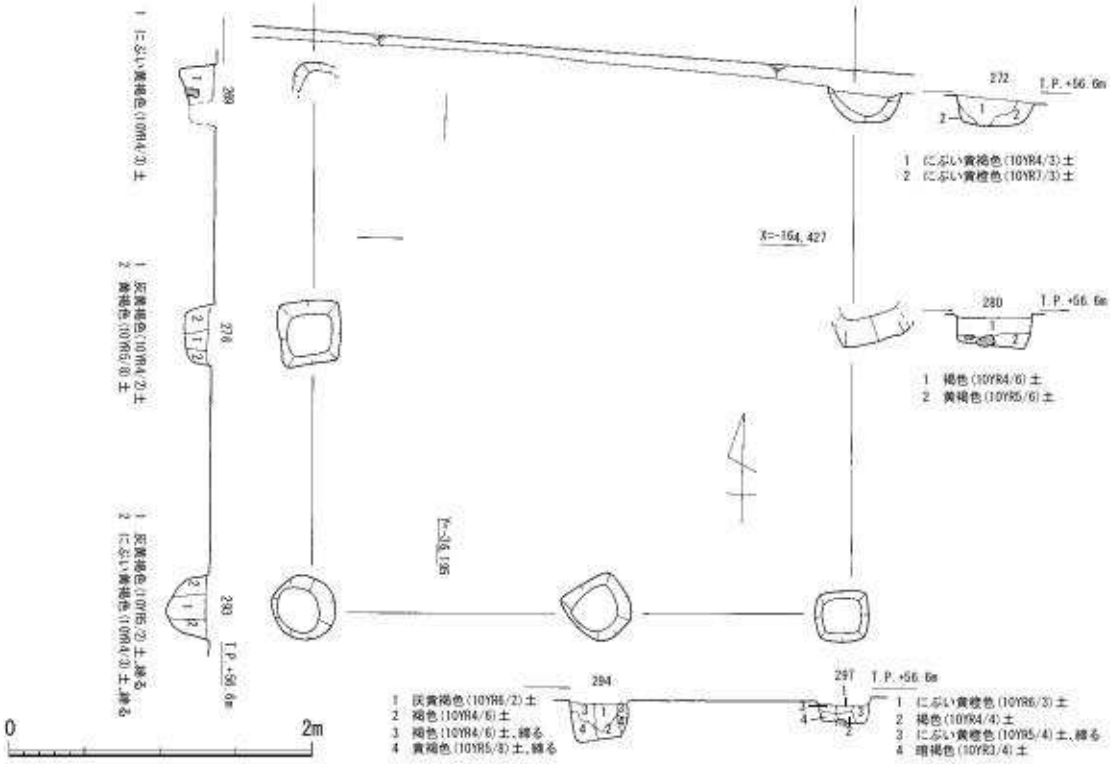
第16図　掘立柱建物３の平面・断面図

出土遺物（第14図）　48～50は建物２出土遺物である。48は柱穴070、49は柱穴075の土師器高杯。いずれも脚部から杯部にかけて継続的に成形し、脚頂部は杯底部に近い。49は胎土に砂粒をほとんど含まず精良で、明るい橙色を呈する。50は柱穴077出土の須恵器杯身。口径約11.8cm、TK10～MT85に位置付けられる。

掘立柱建物３（第16図）　柱穴085・137・136・132からなる建物である。建物は南方の調査区外に延びる。柱間隔は、東西方向より南北方向が長いので、南北に主軸をとる建物と考えられる。梁行２間（3.6ｍ）、桁行不明である。柱間寸法は、梁行側が1.8ｍ、桁行側が2.1ｍ。主軸方位はN－７°－W。柱掘方の規模は、30～40cm四方の隅丸方形、中間柱が30cm弱の円形である。遺物は出土していない。

掘立柱建物４（第17図）　柱穴269・276・293（西側柱列）、柱穴272・280・297（東側柱列）、柱穴294（中間柱）からなる側柱建物である。建物は北方の調査区外に延びる。

建物は、南北に主軸をとると考えられ、梁行２間（3.6ｍ）、桁行３間以上（4.5ｍ）である。柱間寸法は、梁行・桁行共に1.8ｍ程度。主軸方位はN－１°－W。柱掘方は、円形も含むが35～40cm四方の隅

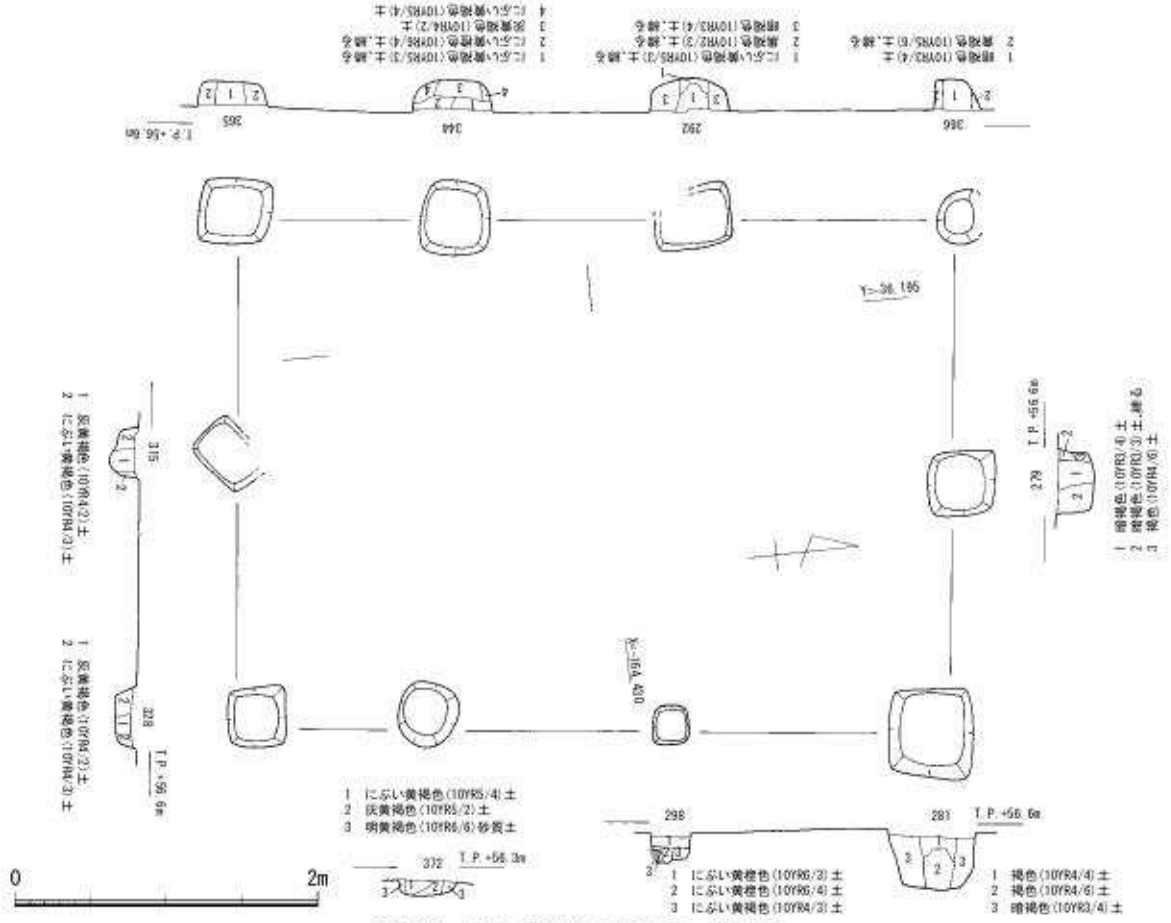


第17図　掘立柱建物４の平面・断面図

丸方形が主体であり、柱痕跡は10～15cm程度である。柱穴276・293・272・294から土師器・須恵器の細片が出土しているが、時期は不明である。

掘立柱建物５（第18図）　柱穴366・292・344・365（西側柱列）、柱穴281・298・372・328（東側柱列）、柱穴279・315（中間柱）からなる総柱建物である。建物は、柱穴372と土坑305の重複関係から土坑埋没後に築造されたものであり、また柱穴292と293の重複関係から掘立柱建物４に先行する。

建物は南北に主軸をとり、梁行２間（3.4ｍ）、桁行３間（4.7ｍ）である。柱間寸法は梁行側が長い。主軸方位はＮ－６°－Ｅで、本建物のみが東にふる。柱掘方の規模は、40～60cm四方の隅丸方形が主体であり、柱痕跡は20～25cm程度である。柱穴292・344・281・298・328・279・315から土師器・須恵器の細片が出土しているが時期は不明である。



第18図　掘立柱建物５の平面・断面図

その他の柱穴出土遺物（第14図）　51～53はその他の柱穴出土の遺物である。51は柱穴357出土の土師器高杯。杯部外面は板状工具によるナデ、脚部内面は横方向のヘラケズリである。充填粘土下部は、鋭くつらら状に突出する。52は柱穴312出土の土師器高杯。充填粘土下部に棒先端で突いたような孔が残る。53は柱穴101出土の須恵器杯蓋。口径9.0cmで、TK217に位置付けられる。

溝001（第10・19図）　110・210区で検出した南北方向の溝である。調査地の地形は、東半部が高く西方に向かって低くなるが、溝はその間にあって高所を囲むようにやや湾曲して掘削されている。溝より東方に遺構は集中するので、集落を区画する遺構と考えられる。規模は幅1.8～2.5ｍ、深さ30cm程度。溝東側の検出ラインは明瞭な曲線で、やや急角度に掘り込まれる。いっぽう溝西側の検出ラインは鋸歯

状である。これは鋤をゆるい角度にして掘削したためで、幅１ｍ程度のテラス状にする。埋土は３層で、上・中層はブロック土の入る粘質土である。須恵器杯蓋55は埋土上部から出土したもので、６世紀後半以降に人為的に埋められたことがわかる。

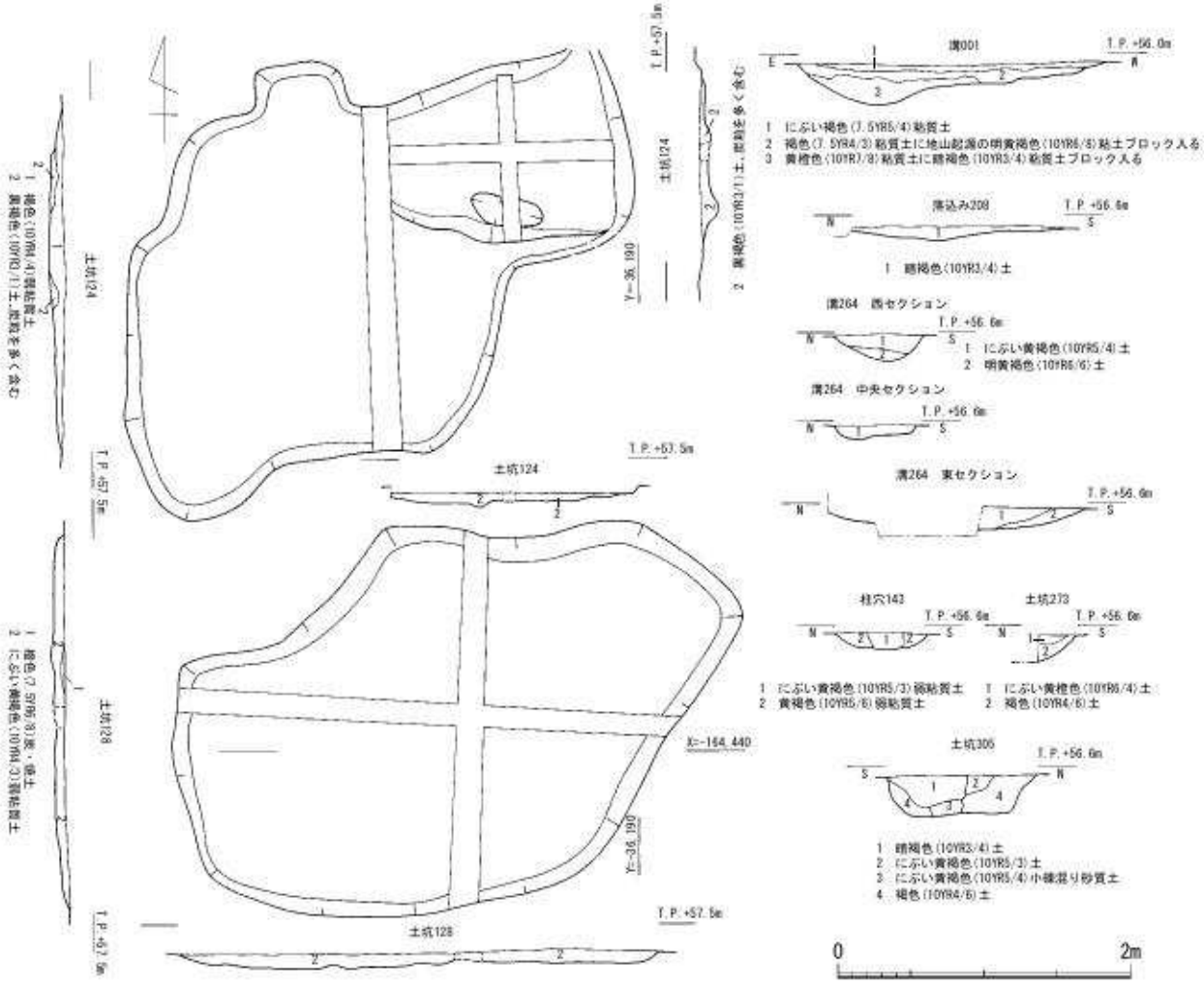
出土遺物（第20図）　54は縄文晩期後半の突帯文深鉢。褐灰色を呈し、胎土にはチャートを主とする粗砂を多量に含む。摩滅により調整、刻み目の有無は不明である。55は須恵器の杯蓋。大きさは口径13.9cm、器高3.8cmで、ロクロ回転右方向。MT85に位置付けられる。

落込み208（第10・19図）　209区で検出した浅く不定形の落込みであり、北端部は側溝幅の中におさまる。中央部で深さ10cm程度。埋土は暗褐色土の一層であり、底面に埴輪片が密着して出土した。

出土遺物（第20図）　72は埴輪であり衣蓋の笠部と考えられる。縦方向の段差が残存しており、突帯以下は笠の縁部を下方に折り曲げた部分で、その表面に巡らせた段差と推定し衣蓋形埴輪として図化した。内外面および破面も摩滅が著しく調整不明。

土坑273（第10・19図）　203区で検出した土坑である。遺構の東部は撹乱、北部は試掘トレンチで掘削され、一部が残存する。遺構の南辺は直線的で、本来は長方形を呈したと考えられる。

出土遺物（第20図）　70は土師器の有稜椀形高杯である。胎土に砂粒をほとんど含まず精良で、明るい橙色を呈する。いわゆる有稜高杯で、今回唯一の出土。体部外面は指頭痕・ナデ、口縁部外面ナデ、内



第19図　古墳時代遺構の平面・断面図

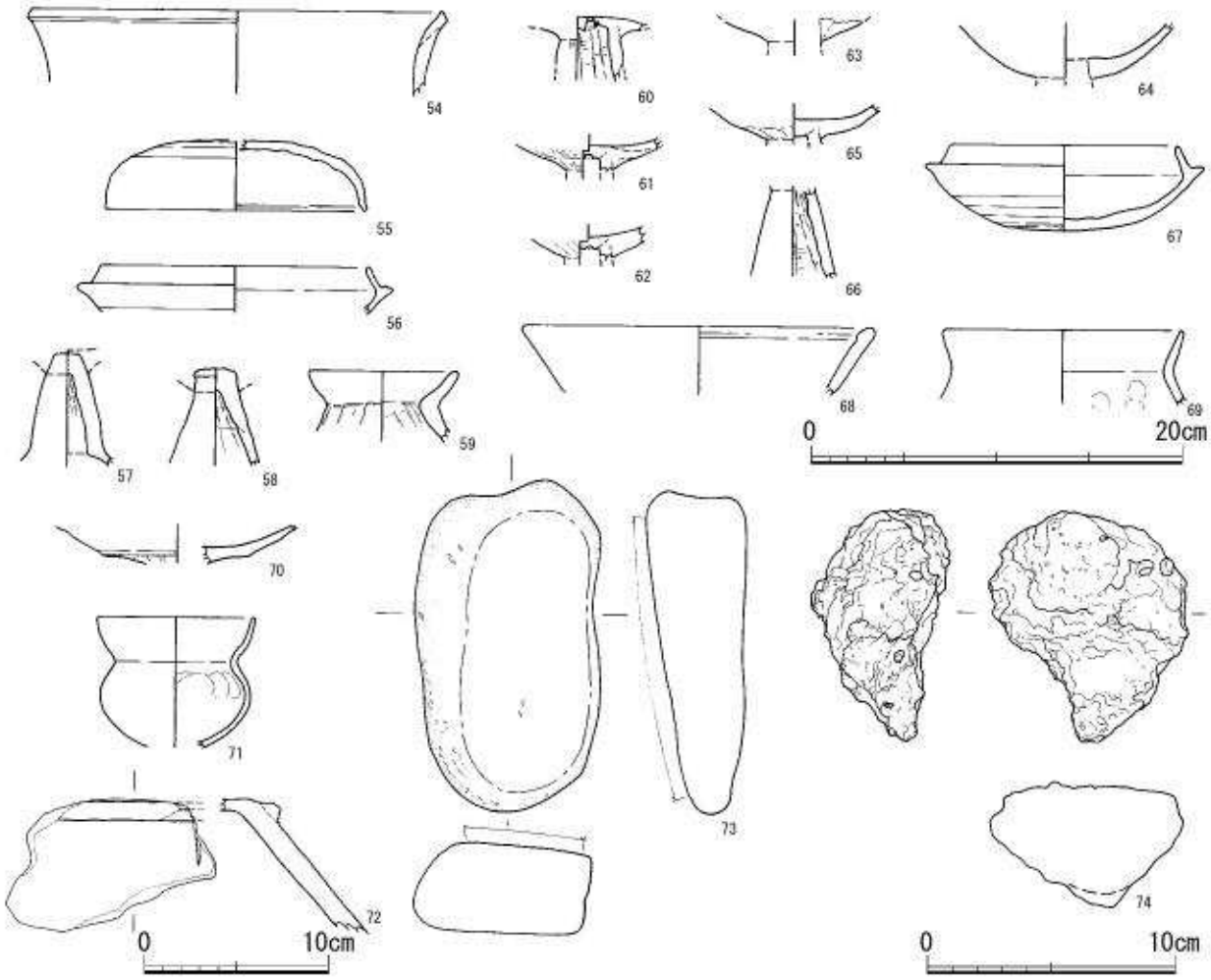
面はヘラミガキである。７世紀前半に位置付けられる。

落込み031（第10図）　108・109区で検出した不定形の浅い落込みである。南方は調査区外に延びる。ほり込みの傾斜はなだらかで、表面はでこぼこである。地山面のくぼみが残存したものであろう。埋土は黄褐色弱粘質土。図化した遺物以外に須恵器、土師器の細片が多数出土した。

出土遺物（第20図）　56～59は落込み031出土遺物である。56は須恵器の杯身。口径14.5cm、MT85に位置付けられる。57・58は土師器の高杯。いずれも脚上部が中実で、頂部は杯底部に接近する。57は内面絞り痕をナデ消す。58は内面にらせん状の接合痕と絞り痕が残る。59は土師器の小型壷。口縁部ヨコナデ、体部外面は縦方向、内面は横方向の板状工具によるナデである。

土坑305（第10・19図）　203区の柱穴集中部で検出した溝状の土坑である。規模は長さ6.5m、幅0.7～1.1m、深さ25～28cmである。平面形態はいくぶん湾曲しており、急角度で地山下部礫層まで掘り込む。埋土は褐色土だが、断面図には柱穴がかかる。多数の柱穴と重複するが、それらより先行する。

出土遺物（第20図）　60～67は土坑305出土遺物である。60～66は土師器の高杯であるが、破損が著しい。60～64は、脚上部から杯部を継続的に成形したと考えられる。60～62の充填粘土下部に棒先端で突いたような孔が残る。60・66の脚柱部内面は横方向のヘラケズリである。63・64は胎土に砂粒をほとんど含まず精良で、橙色を呈する。67は完形の須恵器杯身。大きさは口径12.0cm、高さ4.6cm、ロクロ回転右



第20図　古墳時代遺構の出土遺物実測図

方向。TK10に位置付けられる。

土坑124（第10・19図）　103区で検出した土坑であり、南に隣接して土坑128が並ぶ。平面形は、はり出し二つを有する方形で、規模は東西3.5ｍ、南北2.5ｍ、深さ５～10cmである。埋土は２層で、上層は褐色弱粘質土、下層は土坑の北東部のみが５cm程度くぼみ、そこに多くの炭粒を含む黒褐色土が入る。炭の入る範囲は、東西1.7ｍ、南北1.2ｍである。

出土遺物（第20図）　68・69は土師器の甕である。68は厚手で長胴の布留甕であろう。直線的に外傾する口縁部で端部を内側に幅広く肥厚する。69は摩滅で調整不明。

土坑128（第10・19図）　103区で土坑124と並ぶように検出された土坑である。平面形は不整形で、規模は東西3.8ｍ、南北2.6ｍ、深さ７～10cmである。埋土は、にぶい黄褐色弱粘質土であり、中央やや北よりで炭を含む焼土が見られた。焼土の範囲は直径35cm、深さ２cm程度である。出土遺物は須恵器、土師器の他、椀形の鉄滓１点がある。

出土遺物（第20図）　74は鉄滓であり椀形滓である。平面図の尖った方がフイゴ羽口に近い。鉄滓中に炭などは含まず、また底面に炉底砂粒などの付着も確認できない。重量感があり418.1ｇである。

その他の古墳時代の遺構出土遺物（第20図）　71は106区の柱穴143柱痕部出土の土師器の小型丸底壺。図上復元。完形品であったが、残存状況が悪く接合箇所が消失した。胎土はやや精良で、色調は明赤褐色を呈する。器壁は２～４mmと薄い。体部内面ナデ、その他は摩滅で調整不明。

73は204・205区の溝264出土の磨石。砂岩自然礫を利用したもので上面に磨面がある。重量613.6ｇ。

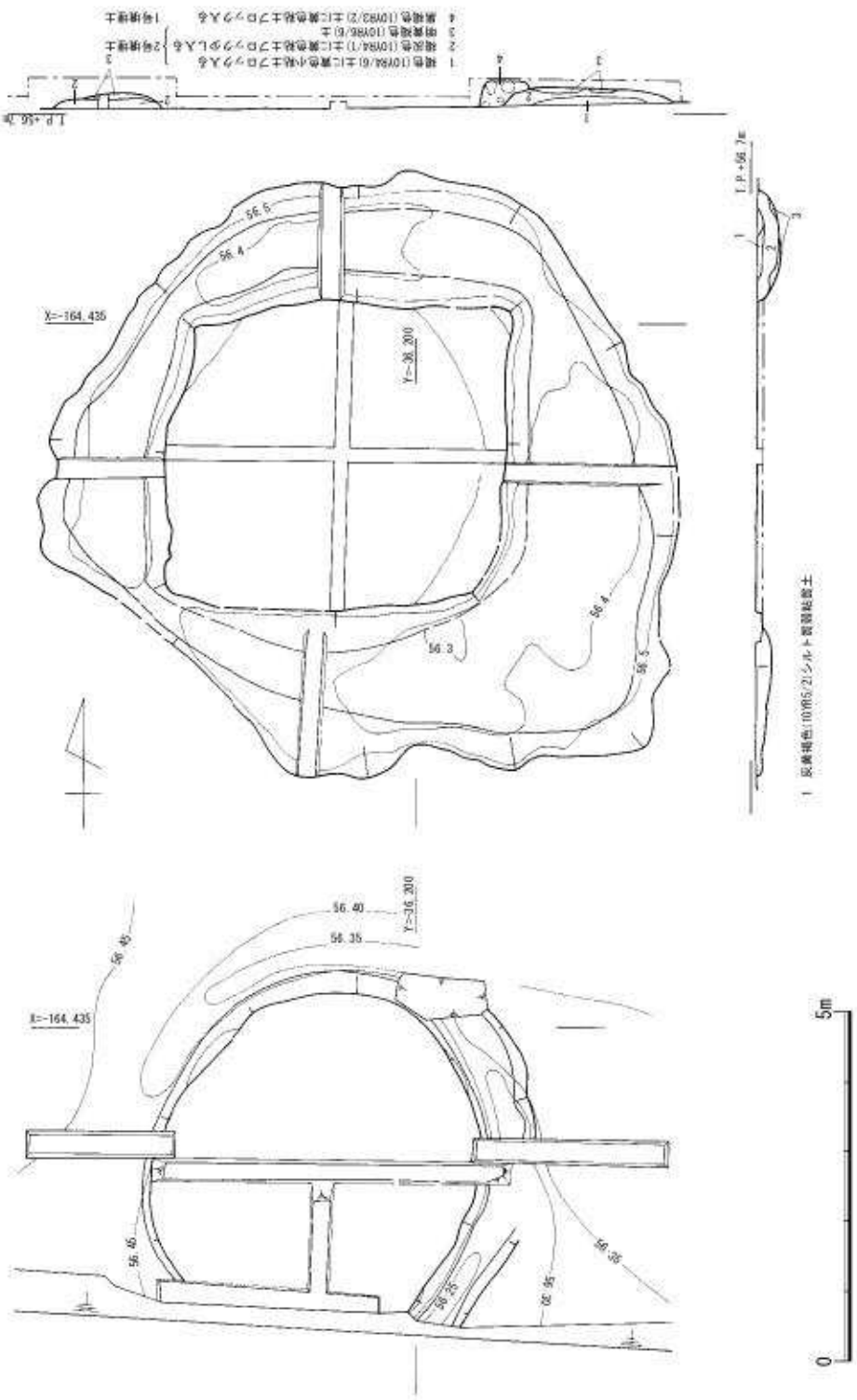
古墳（第10・21図）　平成28年度に古墳周溝の南部、平成29年度に古墳墳丘を検出した。前者では不定形な土坑、後者で古墳であることがわかった。遺構検出の当初から明瞭な方形の墳丘が検出でき、調査終了後の下層確認でやや土壌化の進行した地山表面をはぐと、重複する円墳が検出できた。前者の方墳を「宮町２号墳」、後者の円墳を「宮町１号墳」として報告する。

宮町２号墳は、墳丘はややいびつな方形ながら、ほぼ正方位に築造される。盛土と主体部は残存しない。平面規模は、墳丘裾で5.5ｍ四方である。周溝の外周ラインはラフである。埋土は３層で、上層と中層が褐色土でいずれにも地山起源の小粘土ブロックが入る。下層は地山崩落による明黄褐色土。上・中層からまとまった数量の須恵器と土師器が混在して出土する。須恵器は少数のTK23・47型式と多数のMT85・TK43型式、土師器は布留式後半である。

宮町１号墳は、２号墳々丘の東辺部と北西隅で円弧状の周溝として検出（図版14上）した。西南部は撹乱・土壌化によりラインは不明瞭である。周溝内の地山も高く、陸橋部の可能性もあるが調査区境で確定できていない。墳墳裾での規模は直径4.8ｍの円墳である。周溝は幅90cm以上、深さ38cm以上で、急角度で逆台形に掘り込まれる（図版15）。埋土は黒褐色土でやや大型の地山ブロックが入る。布留式後半の土師器のみが出土する。二重口縁壺104の下半部は、本墳の周溝から出土したもので、２号墳出土品とも接合関係にある。また本墳出土の土師器は磨滅していないに対し、２号墳出土品は磨滅が目立つ。以上から、土師器は本墳の周溝にあったものが、１－２号墳の周溝掘削によってその埋土に混在する状況になったと考えられる。

出土遺物（第22図）　103と104下半部は１号墳周溝埋土、他は２号墳周溝埋土の出土遺物である。

75～87は須恵器。75～77は杯身である。75・76は丸い体部で、器壁は２～４mmと薄くシャープなつく



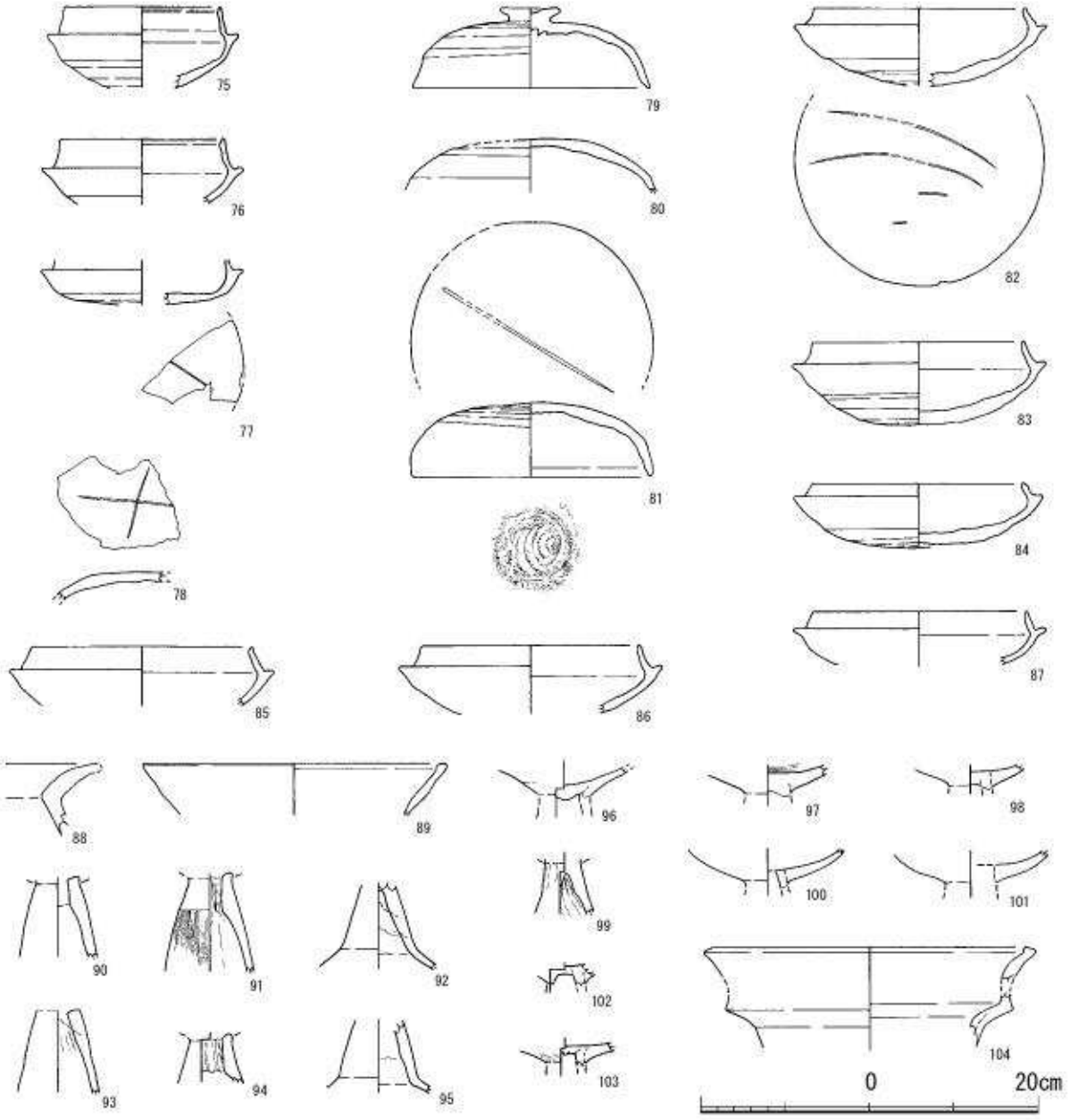
第21図　１・２号墳の平面・断面図

りである。大きさは口径9.2～9.6cm、器高約５cm。77は平坦な体部で底面にヘラ記号がある。３者ともロクロ回転右方向。TK23・47に位置付けられる。なお本段階の須恵器は、他にも数点の破片あるが少ない。78は「＋」のヘラ記号、ロクロ回転右方向である。

79は高杯の蓋。ほぼ完形で口径14.0cm、ロクロ回転右方向である。80・81は杯蓋。81はほぼ完形で口径14.0cm、高さ4.4cm。天井部の外面に太線で「－」のヘラ記号、内面に同心円の当て具痕がある。３者ともロクロ回転右方向。３点はほぼ同じ大きさで、外面の稜線はみられず、口縁端部内面に段を有することも同じで、MT85に位置付けられる。

82～87は杯身。82～84はほぼ完形である。82の大きさは口径12.4cm、高さ4.7cmで、底面に湾曲する「二」のヘラ記号がある。83の大きさは口径12.4cm、高さ4.9cm。84の大きさは口径12.5cm、高さ3.8cm。３者ともロクロ回転右方向。85～87は破片であるが、大きさは口径12.9cm、12.8cm、12.6cmである。ロクロ回転方向は不明。立ち上がり長に若干の差異があるもMT85に位置付けられよう。

88～104は土師器。甕88以外は、円墳に帰属すると考えられる。88は長胴甕の口縁部であろう。口縁部ヨコナデ、体部外面は縦方向ハケ目を施す。89は布留甕の口縁部。口径18cm、直線的に外傾し端部



第22図　１・２号墳の出土遺物実測図

は内面に肥厚する。磨滅が著しく調整不明。

90～103は高杯。多数の破片があるが、全形のうかがえる資料、杯部形態のうかがえる資料は皆無である。破損と摩滅が著しく、すかし孔の有無も不明である。杯部と脚部の接合技法から４分類できる。

１類：完成した脚部をすでに完成した杯部にのせて接合するもの（90・91・93・94・96）。脚部上端が若干杯部にくい込んだ状況を示す。90は摩滅著しい。91・94は内面上半部を棒状工具で突いて整形したと考えられる。93は内面に成形時の接合痕と絞り痕が残る。96は最後に粘土を充填する。

２類：脚部から杯部にかけて継続的に成形し、頂部は杯底部に接近する。脚部により３種類がある。

２ａ類：脚上部が中実のもの（92・97・98・99）。92は内面にらせん状の接合痕が残る。97・98の脚上部の破損面から中実であることがわかる。99は内面に絞り痕が残る。

２ｂ類：脚部が中空のもの（100・101）。100は中空の脚部上端が残り、101は脚部がはがれた資料で

ある。いずれも脚部上面が杯底となる。101も２ａ類の可能性が高い。

２ｃ類：脚部上面が薄く閉じるもの（102・103）。103は脚部内面の中央に竹管状の突出がある。外面の接合部に補強粘土を巡らせる。102は摩滅により判断が難しいが同類と考えられる。

104は土師器の二重口縁壺である。図版24下の下段左が１号墳周溝、その他が２号墳周溝の出土資料であり、それらからの図上復元である。１号墳周溝出土品の残存状況は良好だが、２号墳周溝出土品は摩滅するものが目立つ。大きさは口径39.0cm。屈曲部外面は明瞭な稜線を示し、口縁部は外反し端部は内面に肥厚する。内外面ヨコナデであり、一段目の外面ヨコナデは強く条痕を呈する。色調は橙色を呈し、胎土に長石・石英・赤色斑を含む。甕89と共に、１号墳の時期を示しており、布留３式程度に位置付けられよう。

第４章　まとめ

今回の調査では、上面で中世以降の正方位の耕作溝、地山面で中世の耕作溝、古墳時代～古代の集落、古墳を確認した。明らかになったことを概観し、今後の課題を示しておきたい。

１）宮町遺跡の立地と粟ヶ池の関係について

宮町遺跡の集落域は、調査地の東半で確認した南北方向にのびる微高地上に立地する。居住域の幅は東西50ｍ程度である。この微高地の西方－調査区西半部－は、西に向かって徐々に低くなり、外環状線部分で最も低くなる。その微低地は南北にのび、さらにその西は現在の宮町集落がのる扇状地、そして羽曳野丘陵へと高まる。なお微低地は、調査地南方約100ｍの墓地の南にある谷地形につながる。いっぽう調査地の東部は、南北方向の深い谷地形となる。この谷地形は、中位段丘面を１km程度北進して尺度にまでのびる開析谷につながる。宮町遺跡の東粟ヶ池は、この谷地形をせき止めて築造されたダム式のため池である。よって宮町遺跡は、東方の谷地形と西方の微低地に挟まれた南北方向にのびる微高地上に形成された集落遺跡であることが明らかになった。

ところで、石川左岸流域の水田開発において、粟ヶ池は非常に重要である。その立地は、中位段丘面での水の確保において中心的な位置にあることは明らかである。そして池の維持・管理の必要性から、その西岸に立地する宮町遺跡とも何らかの関係が想定できる。それを考えていく上での、粟ヶ池と宮町遺跡の成立と継続の時期的関係は微妙である。宮町遺跡は、中世以降には居住域から生産域に変化するが、その段階での粟ヶ池の存在は明らかである（註１）。粟ヶ池は中世に堤をかさ上げ、あるいは東堤を新たに築造して貯水量を増加させている。この段階に粟ヶ池の北側、広範囲での地域開発が本格化したと考えられ、宮町遺跡の土地利用の変化はそれに連動したものと考えられよう。

さらに問題は、宮町遺跡が古墳を整地して掘立柱建物群からなる居住域として継続する平安時代初頭までと、粟ヶ池遺跡の出現時期であろうが、その成立については、中世以前であることは確かでも、どこまで遡るのかは不明であることが実情である。粟ヶ池の成立時期の解明は、本地域開発に関わる大きな課題である。

２）古墳について

調査区東半の微高地上の最高所で２基の古墳が確認された。まず円墳（宮町１号墳）が築かれ、その後に円墳の高まりを利用しつつ同じ位置に方墳（宮町２号墳）を築造したものである。築造時期は周溝出土遺物から、円墳が布留３式と考えられる（註２）。いっぽう方墳は、TK23・47かMT85・TK43であろうが、周辺に予想される埋没古墳をあつかった粟田薫氏の研究（註３）から、現状では前者の可能性が高く５世紀後半～６世紀初頭と考えておきたい。方墳の時期が前者としても、円墳との築造時期に100年程度の時期差が見込まれることから、重複は最高所での高まりを利用したことによる偶然の一致と考えておきたい。規模は、円墳が直径4.8ｍ、方墳が5.5ｍ四方の小型である。

これらの古墳と関わる同時期の遺構は確認できていない。まず円墳との関わりでは、柱穴143出土の小型丸底壺71がある。柱痕に完形品で出土していることから人為的と考えられ、建物の解体時期を示す可能性が高い。時期は布留２式で円墳よりも古く、これ以外には遺物すら出土していない。現状では、

周辺に布留式後半段階の集落を想定することは困難で、円墳は孤立した状況を示す。次に方墳との関連では、落込み208出土の蓋形埴輪72があり、今回唯一の埴輪である。段差の表現が残ることから新しくても５世紀中頃とすれば、時期は方墳よりも古い。TK23・47段階の遺構・遺物は方墳周溝のみであり、やはり孤立した状況を示す。粟ヶ池東岸の方墳（註４）を含めて、いずれも在地色の強い小型墳である。石川左岸の中流域段丘上では、多くの埴輪出土地点があることから、時期的に孤立した埋没古墳が想定されており、その実態を示しているのではないだろうか。

３）掘立柱建物群について

調査区東半の微高地上で、多数の柱穴を検出した。柱穴群は調査区北方にのびており、多くの掘立柱建物などが築造と立替えを繰返したことがわかる。これらの柱穴から、５棟の掘立柱建物と１条の柵列を復元したが、ほかにも復元には至らないものの柱穴の並びが多い。柱掘方は30～70cmの方形が主体で、正方位に近い方向性をもつものと、やや西に振るものがある。本来は数倍の掘立柱建物などが存在したと考えられる。問題となるのは築造時期である。開始については、２号墳周溝と土坑305との重複関係によって、柱穴はいずれもその埋土の上から掘り込まれており、６世紀後半以降に位置付けられる。むしろ古墳周溝の埋土は、ブロック土を含む人為的な埋立てであることから、建物を築造するための整地である可能性が想定できる。この段階に墓域から居住域へと土地利用が変化する。

柱穴の出土遺物から、柱穴101のように７世紀以降の存在も確実で、柵列の築造された平安時代初頭までの建物を含むと考えておきたい。ただし今回の全出土遺物からすれば、６世紀後半から７世紀、奈良時代前半、奈良時代末から平安時代初頭のまとまりがある。奈良時代には、数基の土坑も存在することから、前二者の時期により盛期があったと考えられる。今後の周辺地域での調査成果を待ちたい。なお次に取上げる溝001は、いずれかの時期の居住域に関わると考えられる。

４）溝001について

溝001は、遺構集中域の西端で検出され、ここより西側では遺構は皆無に近い。ただし時期の確定は難しく、埋土最上部より出土した須恵器の杯蓋55から６世紀後半以降には埋没したことが確認でき、また斜行溝との重複関係から中世以前とわかるのみである。よって明確な時期は不明ながら、集落域段階の遺構であるあることは確かである。その機能を推定する上で、以下の特徴がある。

①現地の地形は、西方に向かって漸移的に低くなっており、本遺構はその中間部分にある。居住を示す遺構は、本溝より東方に集中し西方では皆無に近い。また東方を巡るようにいく分湾曲している。

②本溝の断面形態は、東側がいくぶん角度をもって掘削され、西側はゆるい角度で掘削されて幅１ｍ程度のテラスを形成する。溝底の標高は、南方がやや低くなっている。

①の状況から、本遺構は東方の微高地上に営まれた居住域の西方の区画となった溝であったと考えられる。ただし調査地の東方は、南北方向の深い谷地形であり居住域を囲むことはない。

②の状況からは、用水路とは考え難く別機能を想定するほうがよい。溝は、西方に浅くテラスがありしかも湾曲していることもあって、北方から水が流れ込んだ場合、流れが強いほど西方の微低地方面に流れ出す構造と考えられる。大雨などにより西方の丘陵部からの出水が想定できるが、居住域を守るため、水を南側の谷地形に落とすための治水機能を目的として掘削されたと考えておきたい。なお残存はしていないが、溝を掘削した土を東側に堤として積んだとすれば、防御性はより高まると推定できる。

5）中世以降の土地利用について

宮町遺跡の周囲には、条里地割が認められる（註５）。それによれば粟ヶ池の北方には、古市郡に至る明瞭な条里地割が確認できる。いっぽう宮町遺跡の所在する粟ヶ池の西方から南方では、東西方向のラインのみで、南北方向は確定しがたいことが示されている。前者は粟ヶ池の灌漑範囲にあるいっぽうで、後者は「深溝水路」からの給水に頼るとしても、その間にある谷地形－宮町部分では外環状線部分－による分離した南北方向の高所部分の開拓は、困難であったのではないだろうか。

今回の調査において、中世以降は田畑としての土地利用が確認できた。それは地山面における耕作によると考えられる溝群と、包含層２上面の正方位の鋤溝群であり、前者は条里地割の施工以前、後者は施工以降の状況を示している。特に後者の鋤溝は、ほとんどが東西方向に掘削されており、復元される条里地割のラインに合致する。問題はそれらの形成時期である。条里地割の施工以前の状況を示す地山面の斜行溝では瓦器が出土することから、中世以降に位置付けられる。いっぽう包含層２上面での条里地割の時期は不明瞭ながら、その下層で中世段階における条里地割の施工以前の痕跡の確認は重要で、宮町周辺での条里地割が大変新しいことが想定できる。少なくとも、粟ヶ池との関連を考えると、北方に展開する条里地割とはかなりの時期差のあることが想定できる。

註

1）粟ヶ池の東岸における発掘調査で、４段階の堤が検出され、その最古段階が中世の堤である。ただしこの堤は、粟ヶ池を巨大化する段階に築造されたものであり、堤以前の堆積土から池の成立はさらに遡ることが明らかになっている（大阪府教育委員会『中野北遺跡Ⅱ』2011）。

2）古墳の時期を示す壷140だが、屈曲部に明瞭な稜線を残しつつ口縁部は外反し端部は内面に肥厚する点で、事例は多くない。近似する事例は、布留３式から４式古段階に併行する藤井寺市津堂遺跡や漆11群に散見する。（石川県立埋蔵文化財センター『漆町遺跡Ⅰ』1986、笹栗　拓「津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年」『大阪文化財研究』第50号　公益財団法人 大阪府文化財センター 2017）。本事例は、屈曲部の稜線が非常に鋭いことから、布留３式に位置付けておきたい。

3）石川左岸の中流域段丘上では、多くの埴輪出土地点が確認できる。図２の遺跡分布図の範囲では、11地点が確認されており、そのうち中野遺跡のみで古墳「新堂古墳」が検出されたが、その他についても埋没古墳の存在が想定できる。それらの埴輪の時期は５世紀後～６世紀前半で、６世紀後半のものは見られないことが指摘されている（栗田　薫「石川中流域、段丘上の埋没古墳」『平成６年度　富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林市教育委員会　1995年）。

4）周溝を巡らせる一辺4.9ｍの小型方墳が検出されている。主体部は、河原石積みの小型石室である。時期は、石室内から須恵器大甕の体部破片が出土しており、古墳時代後期と推定されている。（大阪府教育委員会『中野北遺跡発掘調査概要』2005

5）富田林市役所『富田林市史』第１巻　1985年の付図「石川谷の条里地割」（塚田秀雄作成）による。

報 告 書 抄 録

ふりがな	みやちょういせき
書　　名	宮町遺跡
副 書 名	府道美原太子線整備事業に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2018－1
編集著者名	山田隆一
編集機関	大阪府教育委員会
所 在 地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　℡　06-6941-0351(代表)
発行年月日	2019年3月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
宮町遺跡（みやちょういせき）	大阪府富田林市（おおさかふとんだばやしし）宮町（みやちょう）一丁目	27217	9259	34°31′01″	135°36′20″	20170105～20170307 20171101～20180131	605㎡ 687㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮町遺跡	古墳	古墳	円墳、方墳	土師器、須恵器	
	集落跡	古墳・奈良・平安 中世以降	溝、柱穴、土坑ほか 溝ほか	土師器、須恵器、埴輪、石器他 土師器、須恵器、瓦器、陶磁器他	

要　約	宮町遺跡は、平成15年度の試掘調査で発見された遺跡で、今回が始めての本調査である。調査によって２面の遺構面を確認した。上面で中世以降の正方位の耕作溝群、地山面で中世の耕作溝、古代の集落、古墳時代の集落と古墳を検出した。 調査区の東側は、微高地となっており、そこに集落と古墳が立地する。まず、古墳時代に墓域として土地利用される。古墳は、小形の円墳と方墳が重複して確認できた。その後、整地がなされて集落域となる。土坑や溝などのほか、多くの柱穴が検出され、５棟の掘立柱建物が確認できた。掘立柱建物の時期は、明確ではないが、古墳時代から奈良時代におよぶと考えられる。そして、中世以降には耕作によると考えられる溝が検出され、生産域になる。